

島根女子短期大学移転予定地内

奥山遺跡発掘調査報告書

3年3月

育委員会

島根女子短期大学移転予定地内

奥山遺跡発掘調査報告書

奥山遺跡報告書 正誤表

ページ	行	誤	正
例言	6	吉川 正（文化係主事）	吉川 広（文化係主事）
例言	10	吾郷 明久（文化係主事）	吾郷 明之（文化係主事）
5 凡例	第3図	○ 橋穴墓 — 古墳	● 橋穴墓 — 古墳
42	第24図のグラフ番号	1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10 — 11 — 12 —	7 — 8 — 9 — 10 — 11 — 12 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 —

序

島根県では、島根県立女子短期大学の学科新設と校舎の老朽化に伴い、松江市浜乃木町への大学移転が計画されました。そこで、島根県総務部からの依頼を受けた島根県教育委員会は、昭和61年度に移転予定地において遺跡の有無を確認するため第1次調査を行ないました。その結果、奥山遺跡の存在が明らかになり、昭和62年度に第2次調査を実施いたしました。この報告書はその結果をとりまとめたものであります。

島根県立女子短期大学の移転計画地周辺の宍道湖南岸から意宇川下流平野にかけての微高地は、原始、古代から文化の栄えた地域で、乃木二子塚古墳など数多くの遺跡が知られています。今度調査を実施いたしました奥山遺跡においても、3穴の横穴が発見されるとともに、隣接する丘陵斜面にも多数の横穴が存在することが明らかになりました。特に、今回調査した横穴の1穴からは、「花形紋様」の象嵌を施した大刀が出土しました。象嵌入の大刀は全国的にも出土例が少なく、貴重な発見であります。

発見された横穴のうち一部は、関係者の理解を得ることができ現状保存することとなりました。

本報告書を広くご活用いただき、埋蔵文化財に対する一層のご理解を賜われば幸いに存じます。

なお、調査にあたり島根県総務部をはじめ、御指導、御協力を賜わりました関係者各位に衷心より御礼を申し上げます。

昭和63年3月

島根県教育委員会

教育長 松井邦友

例　　言

1. 本書は、昭和61年度、62年度の2か年にわたって島根県教育委員会が島根県総務部の委託を受けて実施した、島根県女子短期人字移転予定地内奥山遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

61年度　事務局　熊谷正弘(文化課長), 安達富治, 蓬岡法暉(同課長補佐), 欠内高太郎(文化係長),

永塚太郎(埋蔵文化財第1係長), 吉川正(文化係主事)

調査員　蓬岡法暉(同課長補佐), 右井悠(埋蔵文化財第2係長), 川原和人(文化財保護主事)

62年度　事務局　熊谷正弘(文化課長), 安達富治, 騒部昭(同課長補佐), 欠内高太郎(文化係長),

宮沢明久(埋蔵文化財第1係長), 吾郷朋久(文化係主事)

調査員　川原和人(埋蔵文化財第2係長), 三宅博士, 長嶺康典(島根県教育文化財団),
北脇孝夫, 萩原人(埋蔵文化財第2係主事)

調査指導　山本清(島根県文化財保護審議会委員), 町田章(同), 池田満雄(同), 三浦清(島根大学教授), 渡部貞幸(同助教授), 井上貴央(鳥取大学医学部助教授), 蓬岡法暉(八雲中学校教頭)

調査協力　沢田正昭, 記塚隆保, 若野勝治, 穴沢利光, 置田雅昭, 新納泉, 花谷浩, 松田隆嗣,
村上勇

調査補助員　江川幸子

遺物整理　吾郷和子　津森眞弓　飯塚康行

3. 本遺跡出土の人骨ほか自然科学分野からの分析, 鑑定を次の方々にお願いした。

人骨鑑定　井上貴央(鳥取大学医学部助教授)

土壤分析　三浦清(島根大学教育学部教授)　渡部正巳(理学部地質学教室)

大刀の金属分析　清永欣吾(日立金属冶金研究所所長)

A-1号横穴墓の棺材の樹脂鑑定　松田隆嗣(元興寺文化財研究所)

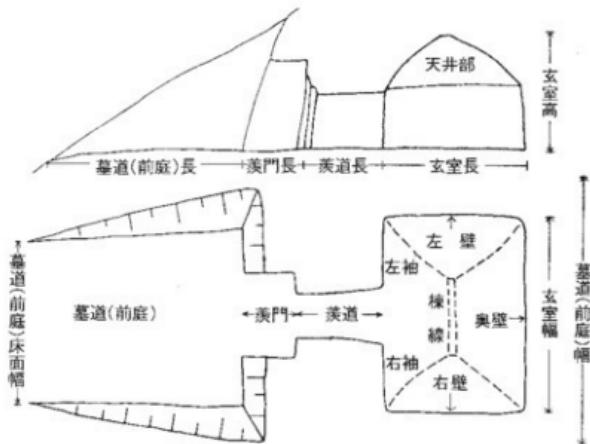
4. 掲載図面は三宅, 北脇, 萩が作製し, 津森, 飯塚が斬書した。遺物写真は三宅と萩が撮影した。

5. 本書の執筆・作図は, 上記調査指導の諸先生の助言を得て, 三宅, 北脇, 萩があたった。

6. 本書の編集は, 三宅, 北脇, 萩が協議してこれを行った。

7. なお, 本書で使用した横穴の部位名称は次頁の図のように呼称した。

8. P 7 ~ 8 に表示したX軸, Y軸は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。地形測量図, 造構実測図の矢印は真北を示し, 国土座標より $0^{\circ}32'W$ の方向を示している。調査区内遺物出土地点等の表示は西方谷筋に向い1m方眼を設定し, そのラインをW0,1,2,3…とし, これと直交するラインをN0,1,2,3…とし, 両ラインから直行して出た遺物までの距離の交点を出土地点W-,N-と表示することとした。



横穴模式図と各部位名称

本文目次

I 調査の概要	北脇	1
II 遺跡と歴史的環境	萩	4
III 遺跡の概要		
検出した遺構と遺物		
1. A-Ⅰ号横穴	三宅	6
2. B-Ⅰ号横穴	三宅	14
3. B-Ⅱ号横穴	萩	20
4. SK-01	萩	27
5. SK-02	三宅	28
6. 土器 潟	北脇	28
7. 遺構に伴わない遺物	萩	30
IV 自然科学分野の分析		
1. 松江市浜乃木町奥山遺跡B-Ⅰ号横穴出土大刀の成分分析	清永欣吾	34
2. 松江市奥山遺跡の互層状土層に見る黒色土層について	三浦 清	37
3. A-Ⅰ号横穴前庭部の埋め土について	渡部正巳	40

V A-I号横穴の保存処置	三宅	45
VI まとめ	三宅・北脇・萩	46

挿 図 目 次

第1図 島根女子短期大学移転地位置図	1
第2図 造成予定地内地形測量図(第1次調査結果)	3
第3図 奥山遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第4図 発掘調査成果図	7,8
第5図 A-I号横穴実測図	9,10
第6図 A-I号横穴出土遺物実測図	12
第7図 A-I号横穴鉄釘出土状況図	12
第8図 A-I号横穴出土鉄釘実測図	13
第9図 B-I号横穴実測図	15,16
第10図 B-I号横穴出土管玉・刀子実測図	18
第11図 B-I号横穴出土上遺物実測図	19
第12図 B-II号横穴実測図	21,22
第13図 B-II号横穴出土大刀実測図	23
第14図 B-II号横穴出土遺物実測図(1)	24
第15図 B-II号横穴出土遺物実測図(2)	25
第16図 SK-01実測図	27
第17図 SK-02実測図	28
第18図 土器窯遺物出土地点図	29
第19図 土器窯出土遺物実測図	30
第20図 遺構に伴わない遺物実測図(1)	30
第21図 遺構に伴わない遺物実測図(2)	31
第22図 奥山遺跡出土石器実測図	32

I 調査の概要

1) 調査に至る経緯

島根県女子短期大学は戦後30年余り経て校舎の老朽化が目立ち、また從来の保育科・家政科の2学科に加えて、文学科の新設により学生人員が増えることになり、松江市浜乃木町へ移転新築されることが昭和59年11月に決定した。そこで、島根女子短期大学移転に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、県総務課と文化課の間で協議がもたれた。その中で総務課からは、移転予定地内の南側の丘陵を削平造成し、建物を新築する計画を示し、丘陵部の遺跡の有無や取扱いについて質問が出された。文化課としては移転新築予定地周辺は、以前に松江市が土地区画整備事業に伴う発掘調査を実施し、数多くの遺跡が認められたところでもあり、また文化課独自に現地踏査したところ、土器片



第1図 島根女子短期大学移転地位置図

及び柱穴状落込みを見つけたため、調査を実施して遺跡の範囲を確認する必要があると回答した。総務課としては調査を実施することになれば大幅に計画を変更する必要が生じ、早急に調査をしてほしいということであった。一方、文化課も当時数多くの調査を手がけており年度途中からの調査に対応することは困難な状況であった。しかし、開校時期などが既に決定されていることなどから緊急に対応を迫られた。このため、昭和61年度内に第1次調査を実施することとした。

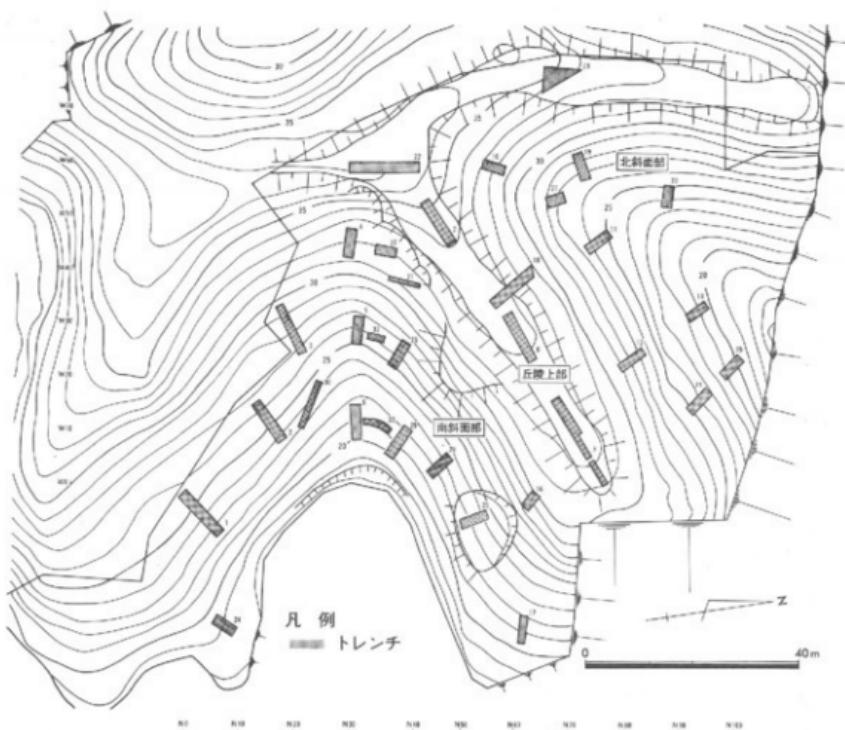
2) 第1次調査

文化課としては前述のように多くの現場をかかえ、調査員の確保も難しい状況であったため蓮岡法暉（文化課課長補佐）が調査担当者となって現場調査にあたることになった。

第1次調査は昭和61年10月26日から12月6日まで行なわれた。調査地域は丘陵上部から斜面にかけての面積10,100m²の広さを対象として、33か所のトレンチを設定し実施した（第2図）。その結果、北斜面部では9か所のトレンチを設定したが遺構と考えられるものは認められず、南斜面部では谷底及び斜面に18か所のトレンチを設定した。遺構と考えられるものはピットが2か所検出されただけであったが、谷部上方の第4・5・27トレンチでまとまって土器が出土した。また、この付近は丘陵上面の緩傾斜地でもあり何らかの遺構が存在することが推測された。谷部下方では谷底にあたる第6トレンチでも土器が集中して出土しており、地形からみて遺構は谷部及びその周辺に存在する可能性が高いと予測された。丘陵上部については、長期間の人为的、自然的作用により平坦化したもので、遺跡の存在する可能性はうすいと考えられた。このように第1次調査では、古墳や住居跡は確認されなかったが、限定された地域で集中して遺物が検出されており、何らかの遺構が存在する可能性があることが明確になった。出土した土器は、約200片余りで須恵器が大部分で他に土師器が數片あった。直ちに、総務課・文化課の双方により第2次調査に関する協議に入り、昭和62年4月より3か月間の計画で第2次調査を実施することで協議が整った。

3) 第2次調査

第2次調査は、三宅博士（島根県教育文化財団学芸主事）を調査担当者に、長瀬康典（同嘱託）、北脇孝夫、萩原人（県文化課主事）の調査員をあわせて4名で昭和62年4月14日から7月31日まで実施した。調査は、第1次調査の結果をふまえて遺跡の存在の可能性が高いと予測された南斜面部約2,800m²を調査対象にした。工程上急ぐ調査区の北側丘陵頂部から表土を除去して行き、遺構の確認を行なっていった。5月下旬段階では、北側丘陵頂部及び北斜面部の表土除去を終了し、土坑1か所を検出したのみで遺物もほとんど出土しなかった。しかし、この後6月1日、南端丘陵上部から調査区に平行するように東西にサブトレンチを設定し掘り下げを行なったところA-I号横穴の羨門部を検出すに至った。さらに、丘陵斜面の表土を除去したところ、ほぼ同レベルに2基の横穴が穿たれていることが明らかになり、計3穴の横穴が存在することが知られるに至った。この



第2図 造成予定地内地形測量図（第1次調査結果）

3穴の横穴のうち7月1日、最も北方にあるB-I号横穴から全長114cmを測る長大な大刀が出土し、X線透視によって鉢元に全国的にも類例の少ない花形紋様の象嵌があることが確認され、この横穴の重要性が論議されることになった。南に位置するA-I号横穴は工事対象地区の境にあることから、法面の傾斜を変えることなどによって現状に残すことも可能であろうと考えられたが、B-I・B-II号横穴は音楽棟の南西隅にあたり、仮に現地保存することとなれば音楽棟を含めた短大敷地内の建物配置の計画変更という大きな問題に関わってくることが考慮された。さらに、大刀が出土したB-II号横穴については移設等についても協議を重ねたが、天井部が崩落していることや周辺の土質が脆弱であること、また、工法の変更は困難であること等から、現状保存は断念せざるを得ない結果となった。そして、現地調査は7月31日に終了した。なお、A-I号横穴については関係者間の協議によって工法を変更することで現地に残すことができたのは幸いであった。

II 遺跡と歴史的環境

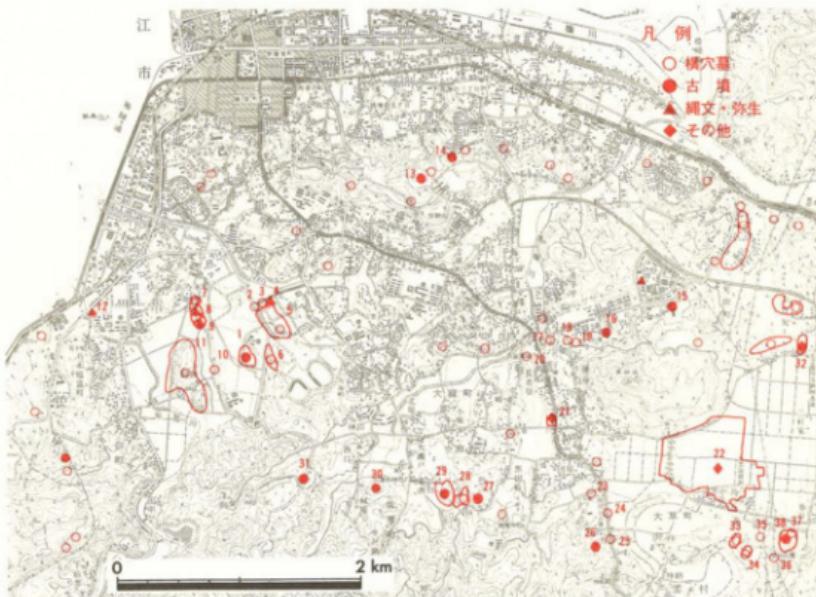
奥山遺跡は島根県松江市浜乃木町2751他の畠地に所在する。市街地から南方へ約4kmの丘陵斜面に位置し、標高30~35mの高さに横穴が分布する。付近一帯は弥生時代の墳墓群や多数の古墳群、遺物散布地等の遺跡が隣接する地域である（第3図）。

この付近の弥生時代の遺跡としては南友田遺跡、友田遺跡、欠田遺跡等が知られている。南友田遺跡では弥生時代前期後半の方形土壙と土器、石鎌、石庖丁、古墳時代終り頃の須恵器等が検出されている。その北側に立地する友田遺跡では26基の土壙墓、6基の墳丘墓、1基の四隅突出型方形墓が確認されている。土壙墓からは弥生時代後期前半を中心とした土器の他、多量の管玉や勾玉、黒羅石が出土している。墳丘墓の主体部からは遺物が出土していないが、墳丘及び周溝から弥生時代中期中葉から後期前半にかけての土器が出土している。また四隅突出型方形墓は出土土器から弥生後期前半と考えられている。西方の低地に立地する欠田遺跡では弥生時代前期後半から古墳時代前期までの土器や石庖丁、磨製石斧等が出土している。

これに続く遺跡としては、古墳時代中期の長砂古墳群、向原古墳群、乃木二子塚、二子塚古墳等が存在する。長砂古墳群は低丘陵上に18基からなる小單古墳で構成されており、いずれも一辺が10~15mの方形墳で主体部は盛土層の浅い位置に長方形土壙を有する。遺物は須恵器（外類、樽形甕、把手付碗等）や土師器、直刀、鐵鐵等が出土している。その北側の低地には乃木二子塚、二子塚古墳がある。乃木二子塚は中軸長36m、前方部高2.25m、後方部高4mの、周濠をめぐらした前方後方墳で、出土遺物から6世紀前半に構築されたことが確認されている。西側に隣接する二子塚古墳は一辺18mの方墳で、山本編年のⅠ~Ⅱ期にかけての須恵器や土師器、鐵製品が検出された。向原古墳群は友田遺跡の北側に位置し、方墳2基、円墳2基からなり4基とも周溝を有する。規模はいずれも10m以下の小規模なもので、構築時期は出土遺物から山本編年Ⅰ期と考えられる。乃木二子塚の東側には石器や土器が出土した下沢遺跡がある。

この他、前方後方墳や方墳が確認されている田和山古墳群や、数基の方墳からなる運動公園内古墳群等、前方後方墳を含めた方墳系の古墳が多くみられる地域である。また本遺跡南東の人庭・大草の丘陵上には後谷・荒神谷古墳群、東・西百塚古墳群をはじめとする中小規模の古墳群と安部谷横穴群、小倉見谷横穴群、大石横穴群等の多数の横穴群が混在して密集している。

さらに奈良時代の遺跡として、出雲国守跡、山代郡正倉跡、出雲国分寺跡、同国分尼寺跡といった官衛官寺跡等が意宇川下流平野に所在する。



第3図 奥山遺跡の位置と周辺の遺跡

地番 図号	遺跡名	備考	地番 図号	遺跡名	備考
1	奥山遺跡	横穴群(3穴)	20	大庭雞塚古墳	方墳・埴輪
2	二子塚古墳	方墳(一辺18m)	21	山代郷正倉跡	正倉跡
3	乃木二子塚	前方後方墳(36m)	22	出雲國刀跡	墨書き土器他
4	下沢遺跡	黒曜石散布地	23	岡田山古墳群	7基
5	長砂古墳群	方墳(18基)	24	岩屋後古墳	墳形不明
6	運動公園内古墳群	方墳(数基)	25	御崎山古墳	前方後方墳
7	向原古墳群	方墳2基、円墳2基	26	小谷横穴群	
8	友田遺跡	墳墓群、土礎基群、四隅突出基	27	大石横穴群	
9	南友田遺跡	土壙、土器散布地	28	荒神谷・後谷古墳群	16基以上
10	後友田古墳	円墳(径11~13m)	29	荒神谷・後谷横穴群	20穴以上
11	田和山古墳群	前方後方墳他数基	30	八重垣社叢の池裏山横穴群	
12	欠田遺跡	散布地(石器、土器他)	31	小倉見谷横穴群	4穴
13	論田横穴群	5穴	32	出雲国分寺跡	瓦類、鉄製品他
14	間横穴群	2穴以上	33	西百塚山古墳群	42基以上
15	十王免横穴群	37穴確認	34	東百塚山古墳群	64基以上
16	孤谷横穴群	17穴以上	35	古天神古墳	前方後方墳・石棺式石室
17	山代二子塚	前方後方墳	36	大草岩船古墳	墳形不明・舟形石棺
18	山代方墳	方墳	37	安部谷古墳群	円墳1基、方墳2基、墳形不明12基
19	永久宅後古墳	墳形不明、石棺式石室	38	安部谷横穴第1群	5穴

II 遺 跡 の 概 要

昭和61年、奥山遺跡の第1次調査を実施、翌62年その結果をふまえ、約2,800m²について第2次調査を実施することとなった。

調査の対象となった一帯の地形は南側の丘陵基部から北及び東に分岐する尾根があって、この尾根によって東方に開く小谷が形成されている。

ここで検出した遺構は北に伸びる尾根上端部で上坑1、そのやや下方斜面に穿たれた横穴3、上塙1、十器溜1、さらに斜面下方の炭化物集積部1であった。横穴については南側のものから、A-I号横穴、それの北側に位置するものをB-I号横穴、B-II号横穴と呼称することとした。本来、横穴の群名を付すには有機的関係を確認したうえで行なうべきであろうが、ここではB-I号横穴、B-II号横穴はかなり接近しているのに対し、B-I号横穴とA-I号横穴との間は約10mも離れていることが注意された。さらにA-I号横穴の東側斜面には明らかに横穴が十数穴集中して穿たれており、同横穴はA群の最も西側に位置するものと考えられた。以上の諸点から便宜上A・Bの2群に分けることとした(第4図)。

B群については調査後工事のため消滅したが、A-I号横穴については調査後一応の保存処置をし埋めもどすこととした。

検出した遺構と遺物

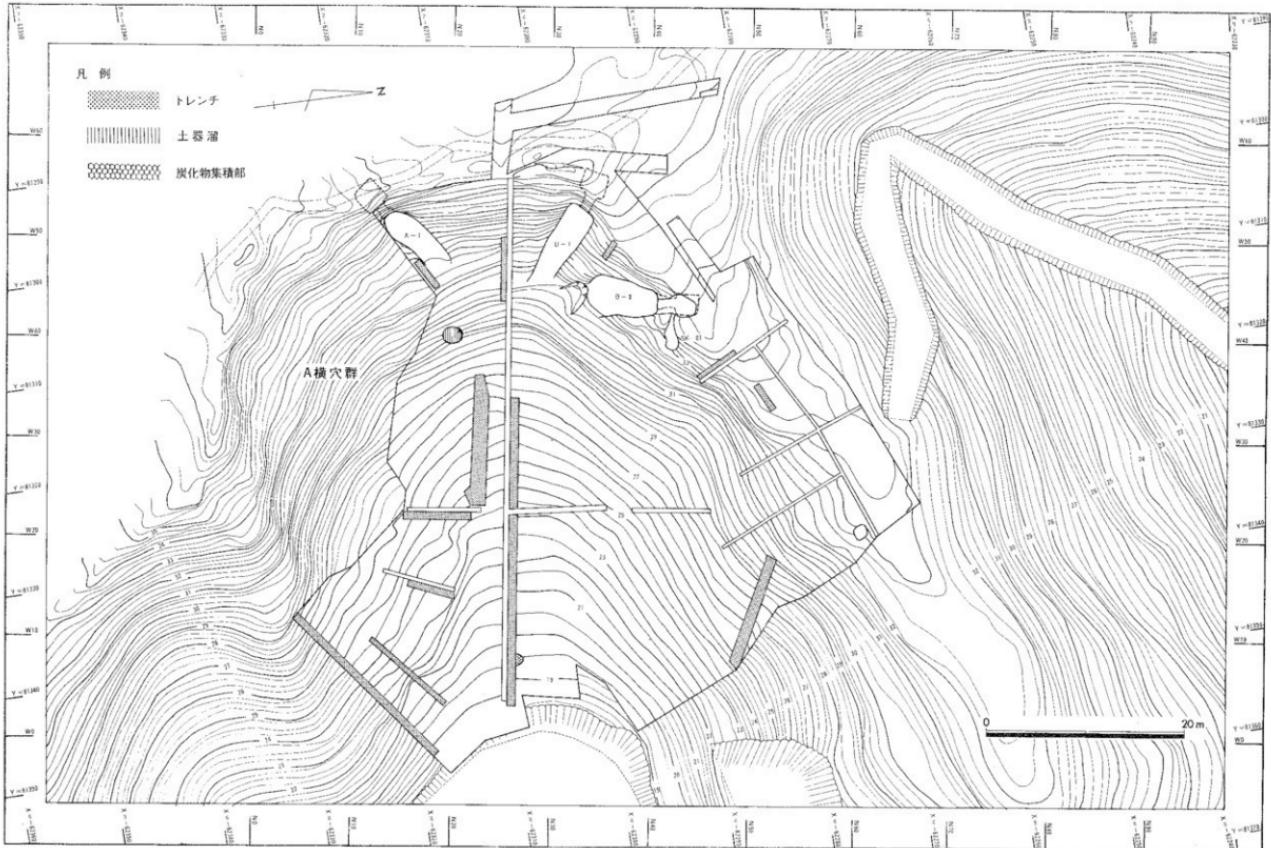
1. A-I号横穴

遺構 調査区南西隅にあって、南から北に向って伸びる尾根の基部の東斜面に穿たれている。玄室及び墓道の主軸方位はN-53°-Eで、北東方向に開口しており、玄室床面の標高は32.6mを測る(第5図)。

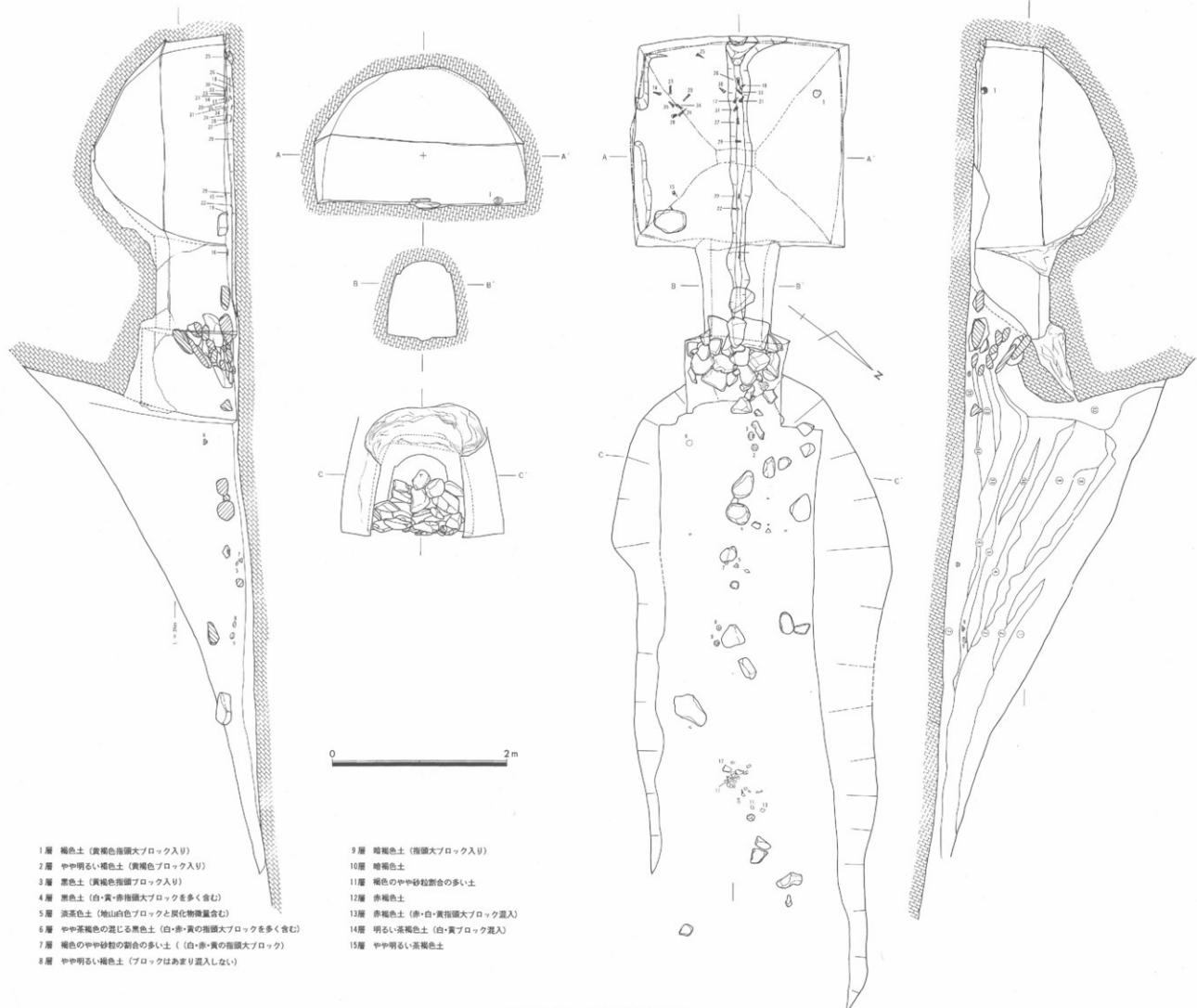
墓道は尾根から約4m下方に穿たれており、北東端部から羨門までの長さ6.6m、幅1.7~2.1m、上端幅2.4~3.1mを測る狭長なもので、横断面は「匁」形を呈す。

羨門は開口118cm、奥行100cmを測る。上部は崩壊しているが、本来は逆「U」字形を呈していたと推定される。羨道は横断面逆「U」字形を呈し、床幅82cm、高さ90cmを測る。羨道の両壁面には床から74cmの位置にはぼ水平に走る削り出しのアクセントが認められた。

羨門部には閉塞用の自然石が16個認められた。これらの石は下方に大形のものが、上方に人頭大から拳大のものがつみあげられていた。もとより、これらの石材のみで閉塞が完了したとは考えがたい。他の横穴でもふれるように木製の板状の閉塞材が使用されたのであろう。



第4図 発掘調査成果図



第5図 A-1号横穴実測図

玄室は奥行2.32m、幅2.4m、高さ1.6mを測り、平面はほぼ正方形を呈すもので、天井は四注平入式の形態である。奥・左右各壁面には床面から74cmの位置に軒線を表現した刻線がほぼ水平にめぐっている。この軒線は羨道の両壁面上方に走る削り出しのアクセントへと繋がるものと考えられる。

床面中央には主軸に沿って、深さ10cm、上端幅22cm、下端幅10cmを測る溝が設けられている。これによって玄室床面は南北に2分割された形となっている。この溝は閉塞石の下で徐々に浅くなり終っている。

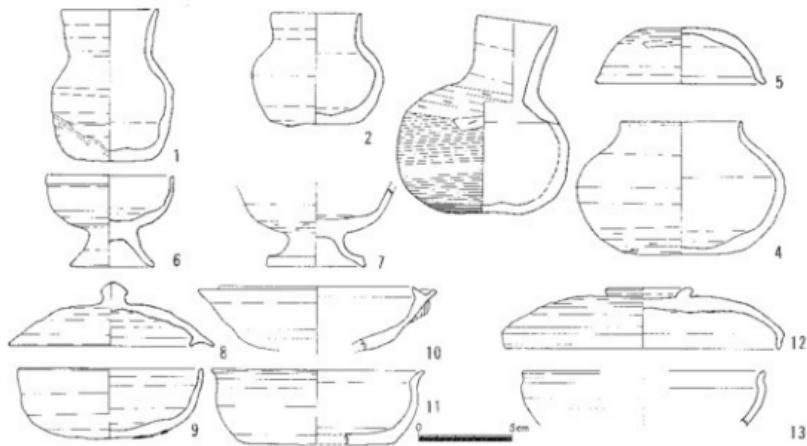
墓道内の土層は地山面にある第7層はほぼ水平に堆積しているものの、それより上層は丘陵頂部に向って約35°の傾きをもって立ちあがるかたちとなっていた。これらはいずれも人為的に埋めもどされたものと判断される。ただし墓道奥壁に接してほぼ垂直に入り込んでいる第12層は閉塞板の腐朽によって陥没した空間に流入したものであろう。

遺物 出土遺物については、大別して玄室内から出土したものと、閉塞施設より外で出土したものとがある（第6・7・8図）。

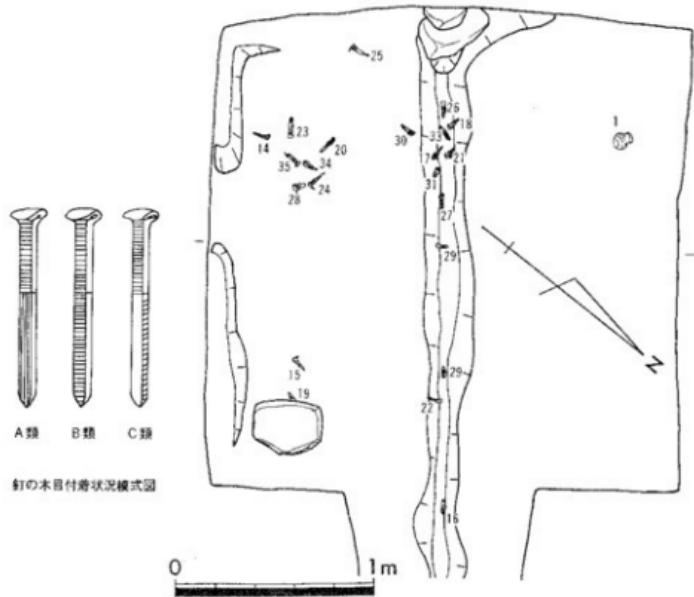
玄室の遺物は右側床面で須恵器壙が、左側床面及び溝内から鉄釘22本が、さらに左袖側に石枕と推定される縦35cm、横27cm、厚さ10cmを測る自然石が認められた。閉塞石より外から出土した遺物は須恵器壙、同長頸壺、同蓋付壺等があった。このうち8・9は第6層内からさほど距離をおかずに出土したのでセットを成すと判断した。

1は玄室から出土したもので、雑な造りで、胴部下半に自然釉とみられる染が付着。2は先の壙をやや低くした感じのもので、焼成は良好である。3はやや頸の長くなる小形壺で、肩部にヘラ削り、それより下方はカキ目がめぐる。4は短頸壺で、胴部下半にヘラ削りが認められ、5はその蓋である。上面にかすかにヘラ削りが施される。6・7は低脚壺で、両者とも壺部外面の一部にヘラ削りが認められる。8は上面に小さな宝珠つまみを付したもので、内面にかえりが着く。9は丸底を呈す壺で8・9とも自然釉が付着し、調整は不明となっているが、出雲国庁の須恵器編年第1形式に属するものであろう。10は蓋付壺の身で受け部の立ちあがりは低い。⁽¹⁾山本編年⁽²⁾に属す。11は壺で底部は糸切り痕が認められる。12は輪状つまみを付した蓋で、輪状つまみ内面は回転糸切り、肩部の一部にヘラ削りが認められ、口縁端部は屈曲しておさまる。13は出雲国庁の第3形式、12は第2形式に属するものと考えられる。13は壺であるが12とセットを成すか否か即断の限りではない（第6図）。

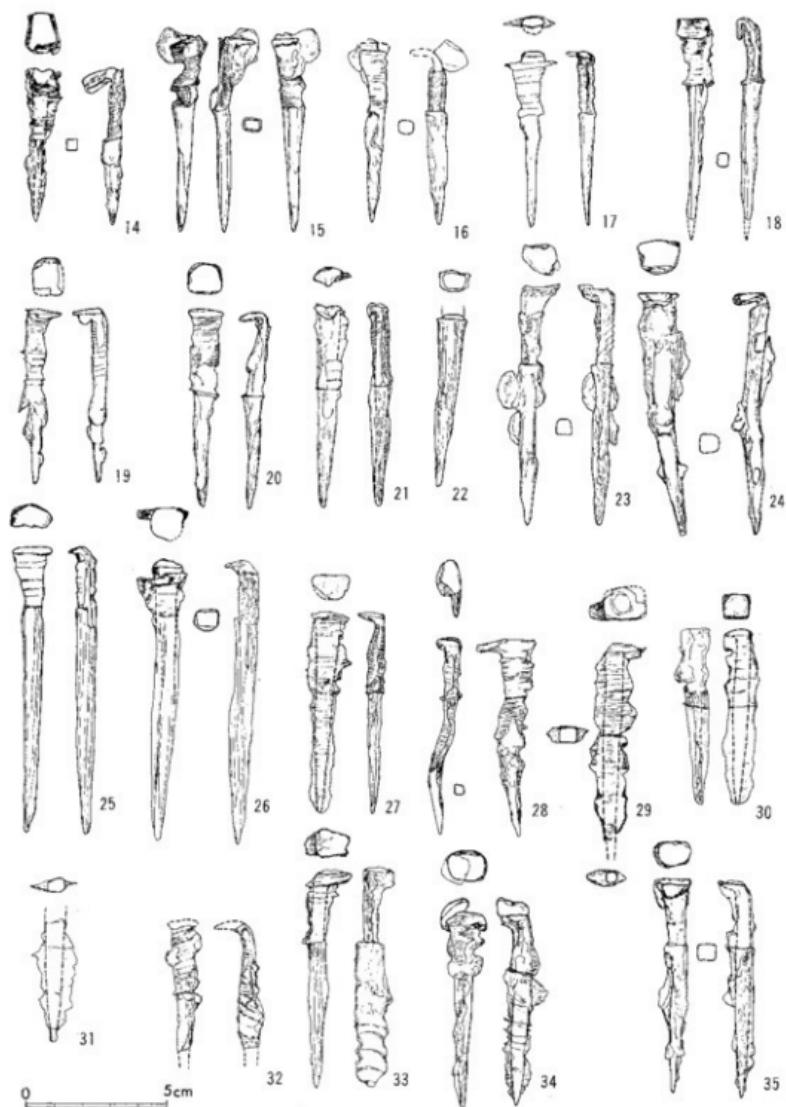
玄室から出土した鉄釘は組合木棺に使用されたと考えられるものである。鉄釘は計22本あって長さ10.2cm～4.4cmを測り、断面方形を呈す鍛造品である。頭部は折り曲げただけの田中彩太氏分類のA-1に属するものである。これらは保存状態は良好で付着している木質もその木理方向まで明



第6図 A-1号横穴出土遺物実測図



第7図 A-1号横穴鉄釘出土状況図



第8図 A-1号横穴出土鉄釘実測図

跡に観察できた。鉄釘に付着した木質の木理方向から以下の3種に分けることができる。

a種（第8図14～26）釘頭に接して木理が横方向にはしり、中央から釘先においては縱方向となる。b種（第8図27～30）釘頭と釘先の木理が横方向にはしる。中央に矧ぎ面が認められる。C種（第8図32～35）釘頭、釘先の両方において木理は横方向にはしるが両者は釘身を軸として直交する特徴をもっている。a・b・c種の鉄釘の内訳はa種13点、b種4点、c種4点、不明1点（31）となっている。以上の分類検討によっては鉄釘の使用箇所も自ら限定され、木棺の仕口の推定も可能となろう。なお、鉄釘に付着していた木質は桧あるいは杉と判断された。

ところで（19）は石枕と推定した石材の下から出土しており、玄室左側床面には先に組合木棺が納められ、その石枕を用いた追葬が行なわれたものと推定される。鉄釘の配置は追葬の際に移動されたのであろう。

2. B-I号横穴

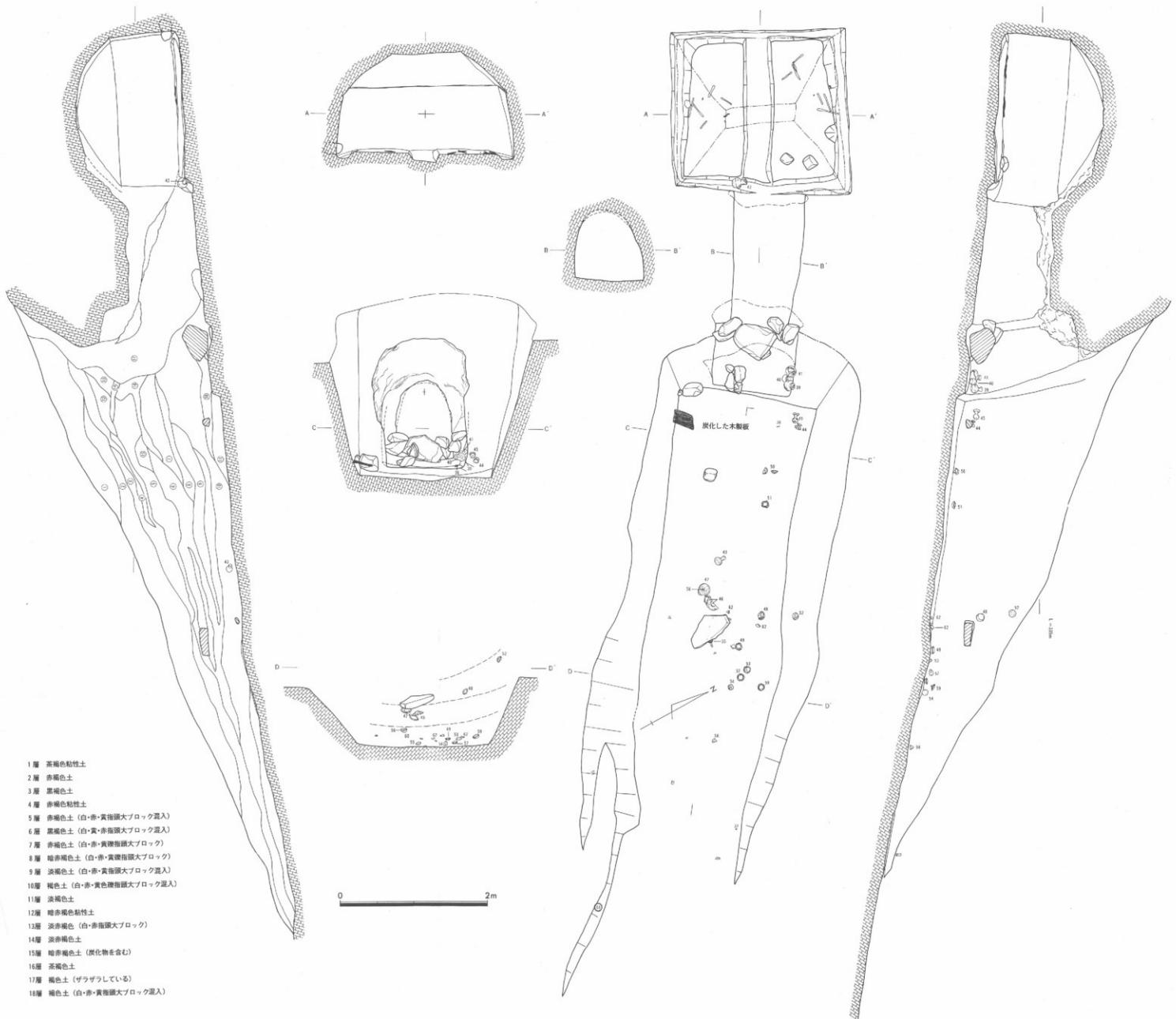
遺構 B-I号横穴は先のA-I号横穴の北方約10mを隔てた斜面に穿たれている。墓道の主軸方位はN-53°-Wとなっているが、玄室主軸方位はそれと一致せず、羨門付近からわずかではあるが南へふっており、N-61°-Wを測る。玄室床面の標高は32.5mを測り、東南方向に開口している（第9図）。

墓道の長さ8.4m、幅1.8～1.4m、上端幅2.3～1.9mを測るもので、横断面は「コ」の字形を呈す。

羨門部は間口1.3m、奥行0.9mを測る。上部は崩壊しているが、おそらくA-I号横穴と同様、逆「U」字形を呈すもので、本来羨道の天井部よりやや高かったと推定される。

羨道は右側壁がやや広く穿たれているため、やや歪な形となっているが、大略逆「U」字形を呈す。床幅0.9m、玄門幅1mを測る。羨門と羨道の境の床には横方向にはしる長さ90cm、幅25cm、深さ3cmを測る船底形の溝が認められた。この溝を覆うように閉塞用の自然石が8個認められた。これらは60×50×32cmを測る大形のもの1個がある他は人頭大のもので、構成されており、高さは羨門部床面から35cmを測るにすぎない。おそらく他の横穴と同様、内側に木製の閉塞材を使用したことわざがわせている。

玄室は奥行2.15m、幅2.38m、高さ1.35mを測り、平面はほぼ正方形を呈すもので、玄門側の天井に崩壊が見られるが天井は四注平入式の形態を示す。奥・左右各壁面には床面から80cmの位置に軒線を表現した刻線がめぐらされている。床面には四方の壁に沿って深さ3～5cm、幅10～25cmを測る周溝が認められ、さらに玄室中軸線に沿って幅40cm、深さ10cmの溝を設けることによって左右2つの屍床が造り出されている。中軸線に沿って設けられた溝の底は奥壁付近では周溝の底のレベルと一致するが、玄門側では周溝の方が深く10cmの落差が生じている。



第9図 B-I号横穴実測図

なお、玄室の壁面下方には小動物の爪痕が各所に認められ、とりわけ奥壁南西隅は径30cm、奥行20cmにわたって大きくえぐられている。

玄室内部に土は流れこんでおらず、玄門あたりでとどまっていた。この土は墓道奥壁に沿ってほぼ垂直に下降した第17層で、閉塞材が朽ちたことにより流入したことによく示している。

以上記した土は自然に堆積したものであるが、以下に述べる土はいずれも人為的に埋めもどされたと判断したものである。羨門部床面に堆積している第18層、第11層で、後者は羨門部床面と、墓道面との落差を埋めるため、前者は閉塞石の下方を固定するためのものであろうと考えられ、この中から碧玉製管玉1点・鰐1点が出土した。これらの土に第10層が堆積しているが、かなり厚く、かつ広範囲に認められる。さらに第9層～第2層と順次埋められたものと推測される。

遺物 出土遺物については大別して玄室内から出土したものと、閉塞施設より外から出土した遺物とに分けられる（第10・11図）。玄室内の遺物としては玄門付近の周溝内から出土した須恵器長頸壺、右側屍床玄門より認められた石枕と推定される角蹠2個の他、人骨3体分がある。

人骨は小動物が入ってかなり移動されていると判断された。いずれも脆弱で採集することは不可能な状態であった。

左側屍床中央で長幹骨5点（内1点は上腕骨、長さ25cm）があり、華奢であることから子供か、あるいは女性の可能性が考えられる。

それらの付近に歯牙が7点あり、咬耗度は0～1で、大きさから成人と考えられる。位置関係からすると先の長幹骨と同じ被葬者の可能性もある。

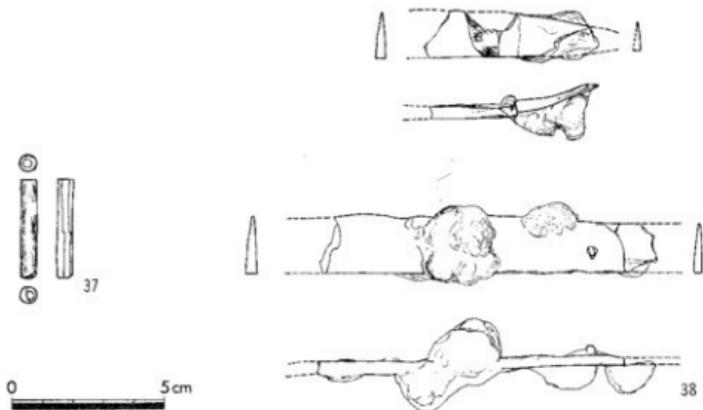
左側屍床の周溝に接する形で頭蓋骨の一部が認められた。骨の厚さが2～3mmときわめて薄いことから乳児か幼児であろう。

右側屍床奥部で長幹骨5点（内1点顎骨）があり、付近に歯牙4点が認められた。歯牙の咬耗度は1であった。これらは成人のものと考えられた。よってこの横穴には少なくとも成人1体、幼児1体、女性かあるいは若年者1体の計3体が埋葬されていたと推定される。

閉塞施設より外つまり、墓道周辺から出土した遺物には多数の須恵器類がある。ただ羨門部壁沿いに正位置に置かれた須恵器平瓶（41）、短頸壺（40）、長頸壺（42）以外はいずれも地山からやや浮いたかたちで認められた。それらは下層の第10層に含まれる群、中層の第6層に含まれる群、さらにそれより上層の群に分けることができる。

これら須恵器類の他に墓道奥壁の南隅で長さ30cm、幅18cm、厚さ2cmを測る炭化した桧の板が出土したが性格は不明である。また墓道右壁の東端部で刀子片と考えられる鉄器37・38が出土した。

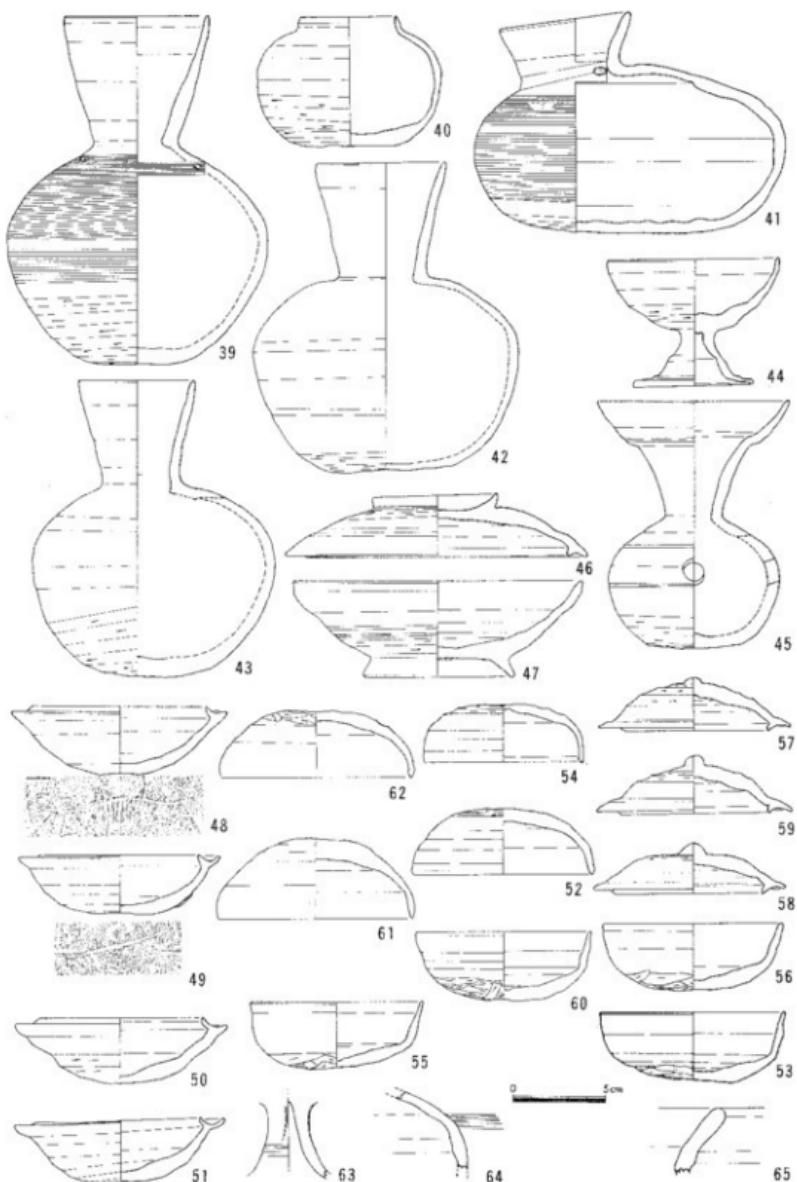
出土須恵器は小片も含めると図示可能なものは計26点ある。39は玄室内から出土した長頸壺である。肩部2ヶ所に竹管文が施されている。肩部から胴部中ほどまでカキ目が認められ、胴部下半は



第10図 B-1号横穴出土管玉・刀子実測図

ヘラ削りとなっている。第18層から碧玉製管玉が出土している。これは濃緑色を示すもので、長さ3.2cm、径0.5cmを測り、二方穿孔となっている。40は短頸壺、41は平瓶、42・43の長頸壺はいずれも底部付近にヘラ削りが認められる。44は低脚杯で杯部下半にヘラ削りが認められる。45は腹で底部は平底となっており、胴部下半にヘラ削りがあり、肩部と胴部中央に2条沈線がめぐる。46・47は高台が付く杯に輪状つまみを配した蓋がセットを成すものである。蓋の肩部、杯の胴部下半にヘラ削りが認められ、輪状つまみ内部、高台内部は回転ナデとなっている。出雲国庁の須恵器編年第1形式に属するものであろう。48~51は蓋付杯の身で、50の底部付近にヘラ削りが認められる他は同様な形態を示す山本須恵器編年Ⅳに属するものであろう。61・62は蓋付杯の蓋となるものでセット関係は不明である。なお、61は第1次調査時に出土したものである。

以下記す蓋杯の蓋には乳頭形のつまみを付したもの57・58・59と、つまみをもたない52・54がある。後者は身と判断した53・55・56・60と形態的には差がない。しかし蓋としたものの上部は回転ヘラ削りとなっており、身としたものは手持ちヘラ削りとなっている。なお53には見込に赤色顔料を入れた痕跡が認められる。この他に第1次調査で出土した遺物として、63の高杯脚部、64の査肩部、65の甕口縁部がある。



第11圖 B-1號橫穴出土遺物實測圖

3. B-II号横穴

遺構 B-II号横穴は調査区西側の頂に近い標高33mにあり、今回検出した3横穴の最も北側に位置する。南西から北東へめぐる丘陵斜面に開口し、玄室と羨道を結ぶ主軸方向はN-11°-Eを測る。東側にSK-01、西側にB-I号横穴が存在する。羨門から玄室にかけての天井部は崩壊し、側壁・奥壁についても床面からわずかの高さしか残存していなかった(第12図)。

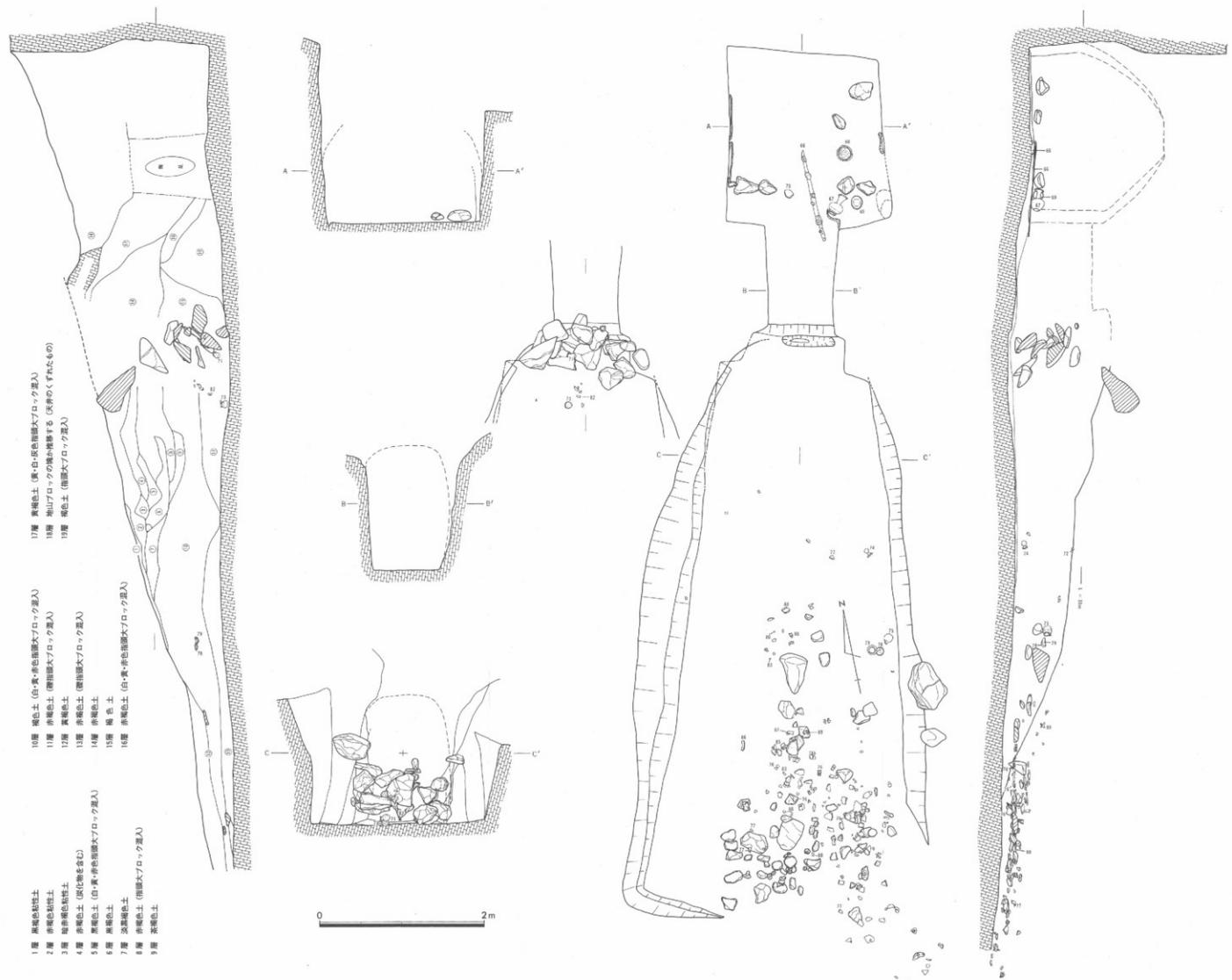
前部は羨門部前から大きく開き、床面は長さ6.5m、羨門付近の幅1.6m、南端の幅3.3mを測る。西壁は、南端でカギ状に約90°向きを変え1m程のびて終る。床面は前庭の中央がやや高くなり、羨門前と南端がそれぞれ低くなっている。横断面は、「コ」の字形を呈する。

羨門は、長さ0.5mと短く、前庭側で幅1.2m、羨道側では1.1mを測り、横断面は天井部が崩壊しているため「コ」の字形を呈する。床面は羨道前で5cm程度高くなっている、段の下端にあたる部分で閉塞に関係すると思われる長さ0.6m、幅0.1m、深さ2cmの溝状の掘り込みが検出された。羨道幅は羨門幅よりもやや狭くなっている、玄室側でわずかに広がる。羨道部の規模は長さ1.25m、幅が羨門側で0.8m、玄室側で0.9mを測る。羨門、羨道ともに天井部は全壊しており、両壁は20~30cmの高さを残すのみであった。

羨門部前面には、径20~40cmを測る自然礫の閉塞石が幅1.2m、床面からの高さ0.8mの範囲で積まれていた。これらの礫は現状では羨道部の奥へ傾くように認められた。羨道内部に礫が積まれた痕跡は見あたらなかった。羨門部の入口は天井部が崩壊しているため確認しえないが、高さは0.8m以上あったものと推定され、これらの礫だけでは充分な閉塞は行なえなかつたことは明らかであろう。羨門床面で検出した溝状の掘り込みは、入口全体を覆う板状の閉塞材があったことをうかがわせ、検出された礫はそれを補強するために積まれていたと考えられる。

玄室の床面は、奥行2.1m、幅が入口で2m、奥壁で1.8mを測り、やや歪形ではあるが長方形に近い平面形を呈し、天井部の形態は崩壊のため不明である。右袖部の床面と奥壁付近に人頭大の礫が2対並べるような形で置かれていた。右袖部のものはたがいに近接しているのに対し、奥壁のものは比較的離れて認められた。同様に左袖側にも近接した1対の石が置かれていた。左袖部の礫は枕に使われたものと考えられるが、右袖部の礫は南北に2個ずつ対応する位置に置かれていることから棺座に使用された可能性と、石枕として遺体を交互に置いた可能性とが考えられる。羨門の側壁や玄室内は動物によってかなり搅乱されていた。

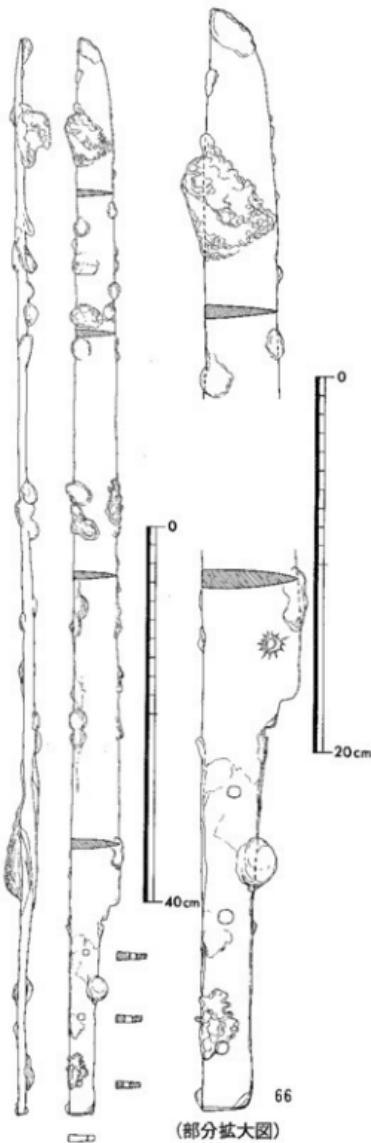
土層堆積状況は、羨門部前から玄室にかけて天井が崩壊してしまっていたことと、羨門部に積まれていた閉塞石が崩れる危険性があったため、羨門部の分層を行うことができなかった。また玄室内も樹根による搅乱と側壁が倒壊したことにより分層を行えなかつた。このため土層の堆積状況から埋め戻しの状況や追葬の有無を推察することはできなかつた。前庭の堆積を見ると第10層と第11



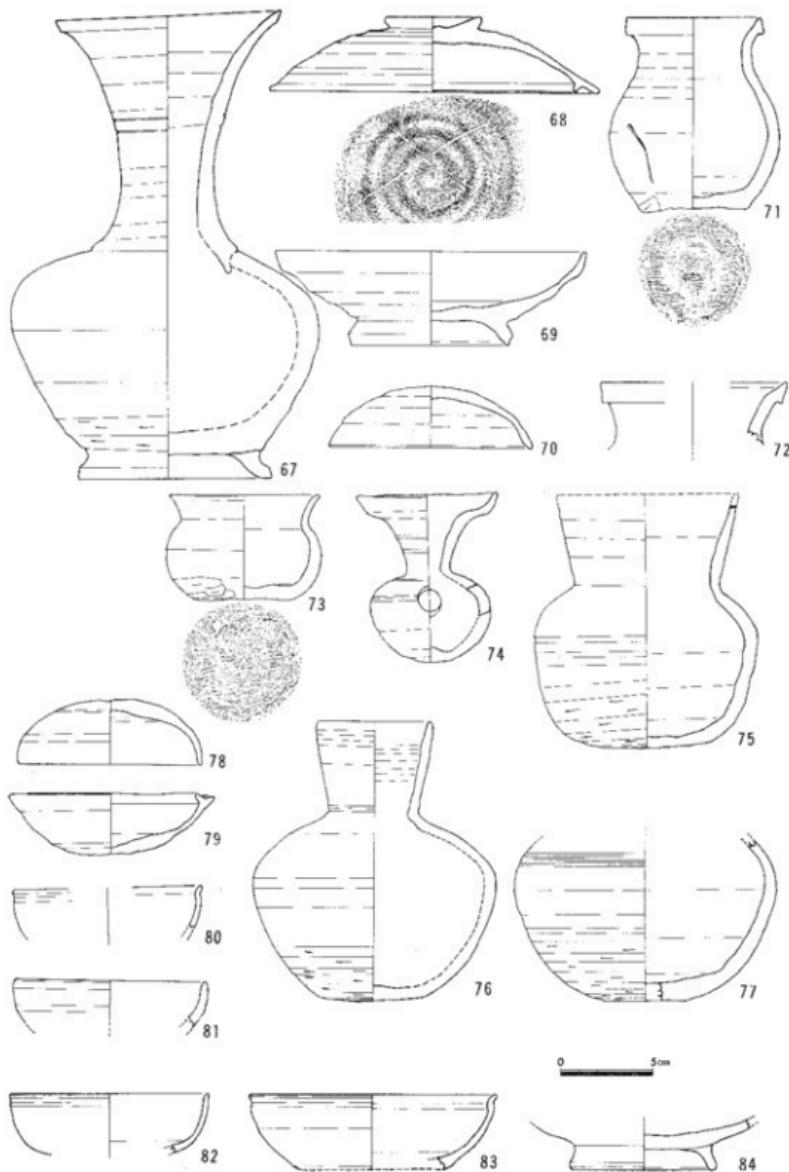
第12図 B-II号横穴実測図

層は横穴の埋め戻し時のものと考えられるが、第1～9層は落ち込んだような堆積状況を示すことから流入した土か自然堆積した可能性もある。羨道から玄室にかけての堆積状況をみると、第17～18層は羨道の一部天井が崩れて堆積したもので、そのすき間から羨門部に堆積した第15～16層が流入してきたと考えられる。その後、羨道から玄室にかけての天井部が全壊して第13～14層が堆積したと考えられる。前庭部の埋め戻しの状況を見ると、他の2穴の前庭部では黒色土をサンド状に何層も堆積させる方法がとられているのに対して、ここでは異なった埋め戻しの方法がとられていたことが注意される。

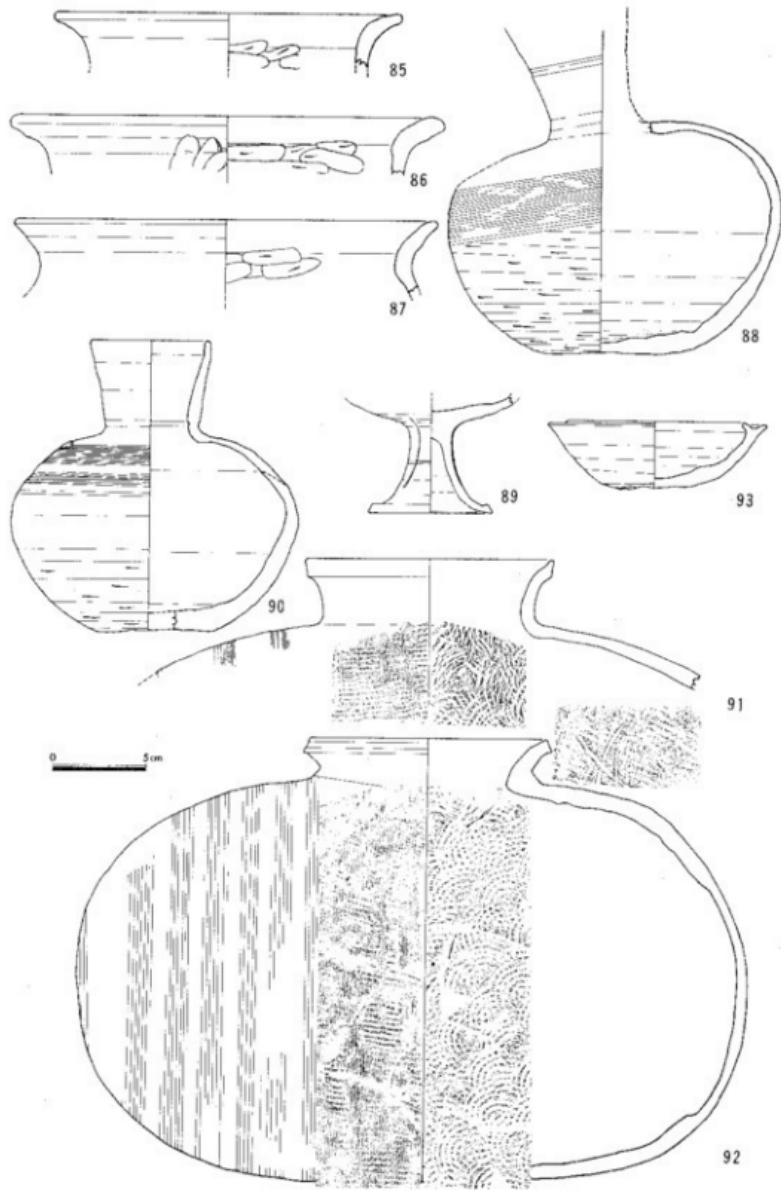
遺物 遺物出土状況は、玄室の右袖部床面から須恵器の長頸壺と环身、そこから1m奥に环身とセットをなす蓋が出土した。玄室入口からは大刀が切先を奥壁に刃を左壁に向かた状態で出土した。この他环身片が1片あったが玄室内からの出土遺物は極めて少ない。玄室内に動物の入った痕跡が認められた。また人骨も検出できなかった。羨門前と羨門内閉塞石手前の床面から広口壺が2点出土したが、これは羨道閉塞時に置かれたものと考えられる。前庭部の遺物は南東端に集中して床面から5～30cm浮いた状態で出土した。遺物の大部分は須恵器であったが、小量の土師器と人頭大の礫が10個余り含まれていた。土器の出土状況は破片が前庭中央部から南端にかけて散乱し、2m×2mの範囲内で出土した土器の中には接合したものもあった。前庭から出土した完形品は床面近くで小形甕(74)がある他は床面から30cm上で出土した



第13図 B-II号横穴出土大刀実測図



第14図 B-II号横穴出土遺物実測図(1)



第15図 B-II号横穴出土遺物実測図(2)

蓋杯のセット（78・79）のみであった。

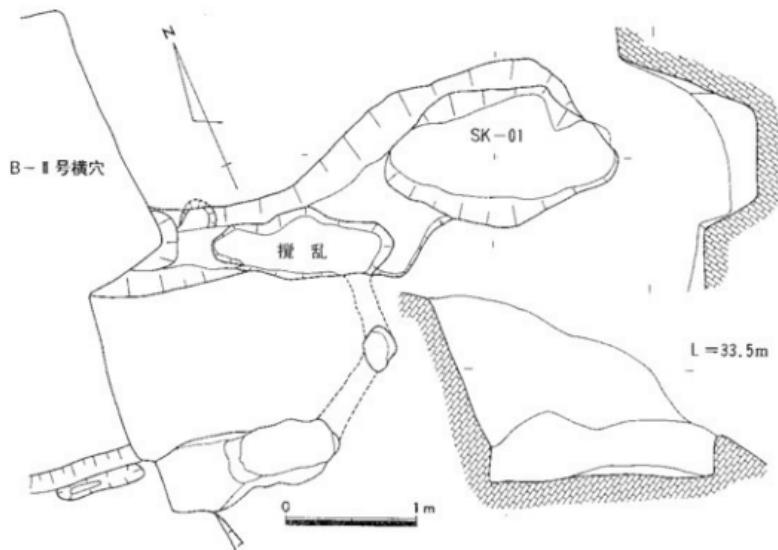
第13・14図の66～70は玄室出土の遺物である。66は平造り鉄製大刀で、関部は片關、切先はふくらがやや枯れている。大刀の全長は114cm、刀身は最大幅（鑑元部）5cm、最少幅（切先部）2.5cmを測り、茎長は関から22cmを測る。茎尾の形態は臼杵歎氏の分類によれば片關一文字尻直茎に相当すると考えられる。茎の中心部及び関と尻に近い両端に合計3つの目釘穴が穿たれている。また茎の関付近には、幅が0.6cmで0.5cm程度削り込まれた方形のえぐりがあった。この他X線撮影により刀身の鑑元に花形紋様の象嵌が施されていることが判明した。この花形紋様は、径0.6cmの円形紋の周辺に0.2～0.4cm程の「U」字形の花弁が11個めぐらされたものであった。67は大型の長頸壺で頸部中央に2条の鋭い平行沈線が廻っている。底部に回転ヘラ削りを施し高さ1.5cmの高台をつける。68・69は蓋杯のセットで68は口縁内面にかえり、天井部外面に輪状つまみを付ける。天井部外面1/3の範囲で回転ヘラ削りを施す。天井部内面に「×」形のヘラ記号が認められた。69は全体にナデを施し、高さ1.5cmの高台を付ける。天井部内面が磨耗している70は蓋で、天井部外面はナデるのみであるが、内面にはヘラ状工具による不整方向の削りを施している。71～73は広口壺で、71は羨門内、72・73は前庭部から出土した。71は平底で簀子状痕跡がのこる他、底部の一部をヘラ状工具で整えている。胴部に「ノ」形のヘラ記号が認められた。72は口縁部のみで口径は不明。71と同じく口縁外面に平坦面をもつ。73は口縁部が外方へと開く。底部は簀子状痕跡をナデしているが、底部と胴部の境界部分は一部ヘラ状工具で整えている。74～92はすべて前庭部出土の遺物である。74は壺で口縁部がラッパ状に大きく開く。1条の平行沈線が頸部中央に2ヵ所、胴部と頸部の境と胴部中央にそれぞれ廻る。底部外面に不整方向のナデを施す。75は直口壺で外面底部に回転ヘラ削りを施している。76は壺で頸部と胴部の境に1条の沈線を廻らせる。底部に回転ヘラ削りを施す。77も壺の胴部と考えられる。胴部外面に8条の回転カキ目が廻り、底部に回転ヘラ削りを施す。78～84は蓋杯類である。78・79は蓋杯のセットである。78の外面には肩部に沈線を入れてわずかに稜を作り出し、天井部はヘラ切り後ナデる。口縁はほぼ垂直で壺部は丸い。79は内面受部に短いたちあがりをもち底部外面はヘラ切り後ナデる。80・83は口縁が「く」の字状に開き、81・82は口縁が上方へまっすぐのびる口縁を持つ。いずれも底部を欠いている。84は高台を付ける壺でナデを施す。第15図の85～87は土師器壺口縁でゆるやかな「く」の字状を呈し、外面は横方向のナデ、内面の口縁部は横方向のナデ、頸部以下はヘラ削りを施す。88は須恵器の壺で、頸部中央に1条の平行沈線が廻っており、胴部半分から下は回転ヘラ削り、中央部は回転ヘラ削り後に回転カキ目調整を施す。頸部は意図的に斜めにとりつけられている。89は小形高壺で、脚部の3方にヘラ状工具で浅くいた透かしがみられる。脚部中央に1条の平行沈線が廻り、壺部で大きく外方へと開く。90～93は、昭和60年度試掘時の27トレンチから出土した遺物で、92は本調査で前庭から出土した破片と接合で

きた。90は提瓶で、肩がやや張り出しており、外面に円形の突起をつける。胴部外面に回転カキ目、底部に回転ヘラ削りをほどこす。内面に頸と胴部を接合時にできた沈線がみられる。91は横瓶の口縁から肩部にかけての部分で、肩部外面にタテ方向の回転カキ目がみられる。口縁端部外面に平坦面をもつ。92は横瓶で、口縁は短く外反し端部にやや凹んだ平坦面を作る。胴部は外面に平行たたきの後カキ目を施し、内面は同心円たたきを残す。短径の一端に成形時に粘土で蓋をした痕跡が残っていた。肩部に文字に類似したヘラ記号が確認された。93は内傾する短いかえりをもつ蓋で、底部はナデるのみである。

4. SK-01

SK-01は、B-II号横穴から2m東の標高33.5mの南側斜面に穿たれた東西1.73m・南北1mの不整な椭円形土壙である（第16図）。壁はほぼ垂直にたちあがり深さは25~30cmを測るが、北端のように土壙を掘りはじめた地表から下端まで1m近いところもある。土壙の西端からB-II号横穴の間までは、小動物による搅乱をうけているため、西側の掘方は現存していない。

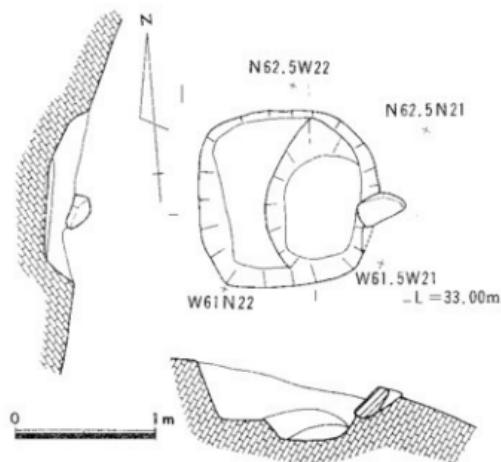
出土遺物は認められなかったが、横穴のすぐ横に位置する点や、下端の規模も1.7m×0.7mある点等から土壙墓であった可能性も考慮される。



第16図 SK-01

5. SK-02

北へ向って伸びる尾根上の東端に位置する2段掘り土坑である(第17図)。表土約15~20cmを除去すると上面で指頭大の炭化物が散在する形で認められた。検出したSK-02は隅丸方形を呈し、東西126cm、南北120cmを測る。この土坑は中央より西側半分がテラス状となっており、東側は一段深く掘り込まれ、この部分の底面プランはほぼ隅丸方形を呈す。検出面から西側のテラス面までは30~25cm、この

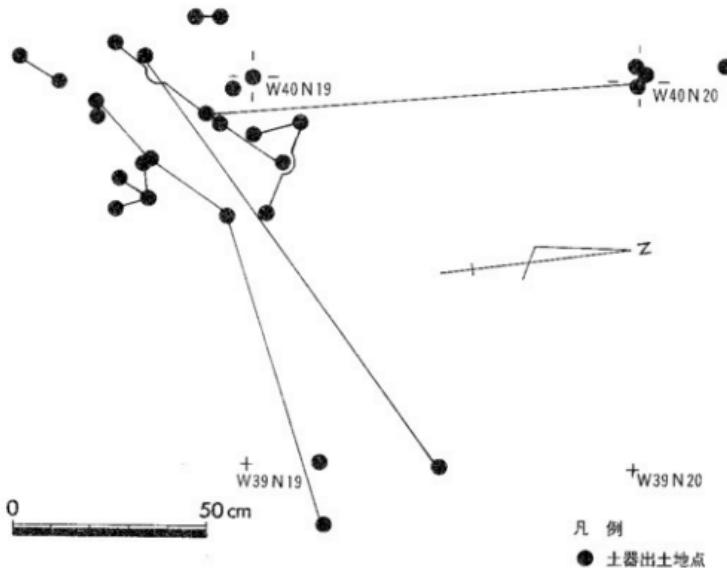


第17図 SK-02

平坦面と東側底面との落差は約15cmを測る。なお、東側掘方の中央に上面が平坦な石が1点認められるが、これは地山に含まれているもの一部が露出したにすぎない。上面で、炭化物が見られたが、火を使用したことを推定させる痕跡は認められなかった。

6. 土器 潟

調査区の南側A-I号横穴墓道前端よりやや下方の斜面、W40N19付近で意図的に破壊されたと推測される約30片の土器片が径1.5mの範囲で散乱していた(第18図)。採取された遺物は図19のように須恵器及び土師器であった。94~105は蓋坏類である。94は底部内外面ともナデ調整で、内面に「ナ」状のヘラ記号を有す。95の底部内面は中央がややくぼんでおり、ナデ調整を施す。外面に濃緑色自然釉が付着しており調整は不明である。96は、平底に近く底部外面はヘラ状工具によるおこし痕があり、調整が不十分である。97は外面一部に緑色自然釉が付着している。底部外面に「ノ」状のヘラ記号がある。98は受部たちあがりが内弯しながら短く内傾してのびている。99~101は底部または天井部が欠損している。99は、たちあがりは内傾してのびており、ナデ調整を施す。100は、たちあがりは短く内傾してのびるが、内側に際だった境界を示さない。外面には灰色自然釉が付着している。101は蓋で天井部は欠損しており、口縁端部は比較的鋭い。102~105は口縁部のみである。102は受部のたちあがりが上方にのびている。内外面ともにナデ調整を施す。103の受け部は小さく外反し内傾してたちあがる。104は受け部と体部の境界は明瞭な稜線を有しない。105は受け部で横方向にのび端部に至る。106は低脚環で口縁部が欠損している。坏部外面はていねいなへ

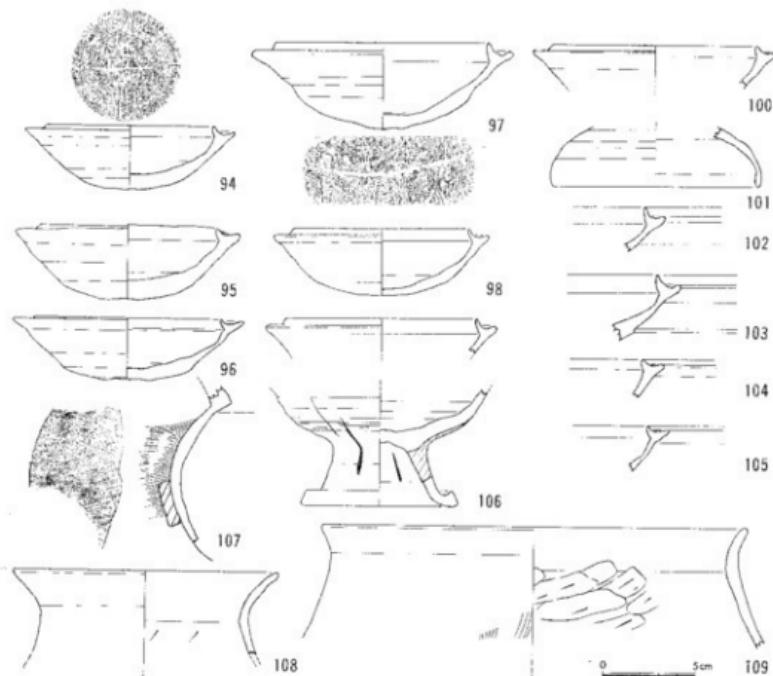


第18図 土器溜遺物接合関係地図

ラ削り調整を施している。107は平瓶胴部であり、外面はカキ目が施してある。裏片が付着している。108・109は土師器裏片である。108は内面胴部がヘラ削りで、外面下方に数条のハケ目が縱方向に施されている。109は頭部がくの字形になっている。内面胴部にヘラ削り痕らしきものがあるが風化の為詳細は不明。

7. 遺構に伴わない遺物

下記のような遺物が、調査区内の表土及び埋土中より検出された。110は鉄器で断面が三角形を呈するが、刃物であるかどうか判断しがたい。111は金銅製の耳環で表面には鍍金が明瞭に残る。112は須恵器の直口壺で肩部に「タ」のヘラ書きが認められる。底部外面に回転ヘラ削りを施す。113から115は壺の口縁で、まっすぐ口縁端部までのびるもの（113・114）と端部が外面に外反する平坦面をもつもの（115）がある。116は壺の胴部で、外面の胴部中央までを回転カキ目、中央から底部までを回転ヘラ削り調整する。117は横瓶の頭部から肩部にかけての部分で、外面肩部は平行たたきの後に回転カキ目調整を施し、内面には同心円たたきが認められた。118は甕の頭部から肩部の部分で内面に同心円たたきが認められた。119は、甕の胴部から底部に至る部分で外面に格子

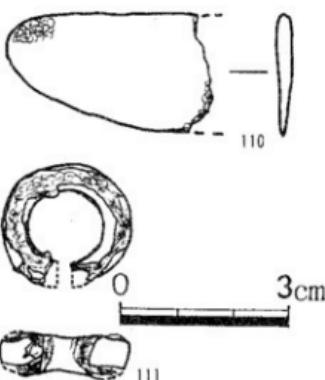


第19図 土器窯出土遺物実測図

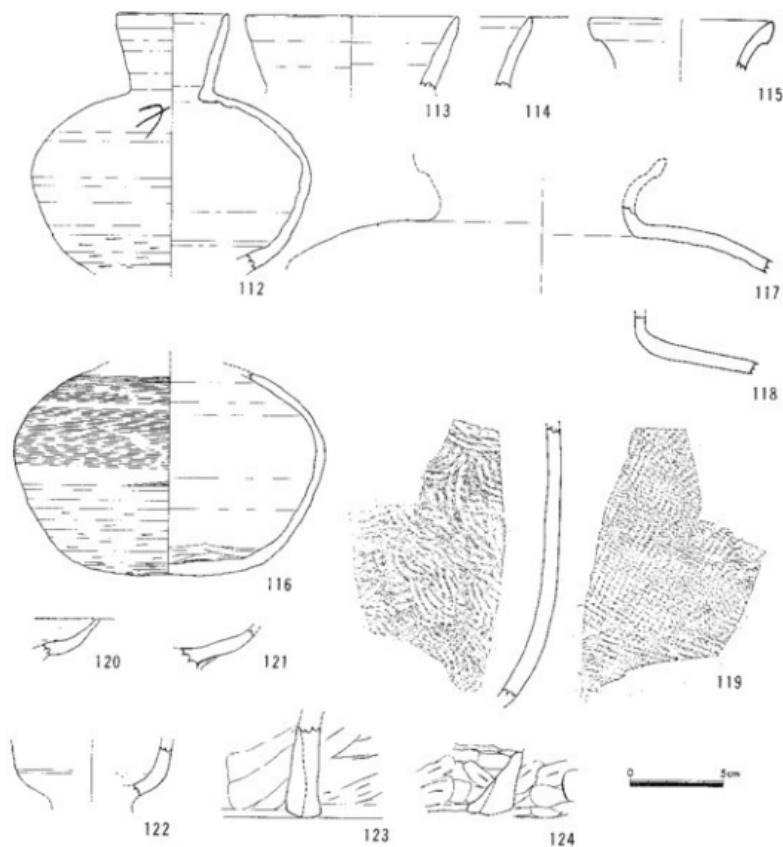
たきを残し、内面は同心円たきを軽く擦り消す。

120は器種不明であるが口縁部と考えられ、内外面にナデ調整を施す。121は高坏の坏部で脚部との境界にヘラ状工具で入れたすかしがある。122も高坏の坏部で、外面に櫛状工具でつけた刺突文がめぐる。

123は埴輪の基底部と考えられ内面にはヘラ削り、外面にはナデ調整を施す。124は土師質で器種は不明で、内外面をヘラ状工具で削って整えている。112～114、122は第1次調査の6トレンチ、115は10トレンチ、117は5トレンチからの出土遺物で、123は表採遺物である。その他は第2次調査時に出土した遺物である。125～130は表採した石器類である。

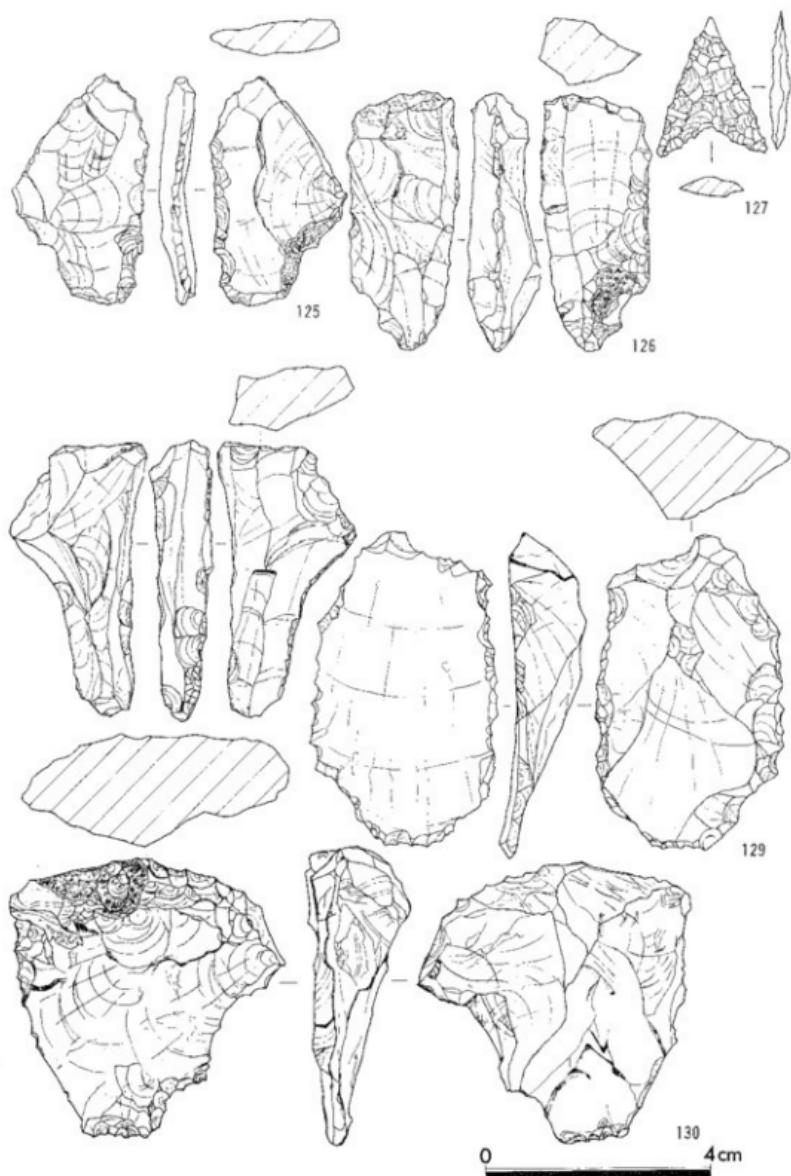


第20図 遺構に伴わない遺物実測図(I)



第21図 遺構に伴わない遺物実測図 (2)

125は玉髓質めのうのスクレーパーで片面に刃をつける。126は楔形石器で細長い上下方向の剥離痕が多く見られ、材質はめのうである。127はV字形を呈す黒曜石の石鎌で先端部が欠損している。128はめのう製の楔形石器状の石器である。129はめのう製の剝片石器で縦長のものであるが途中で折れ、周囲はローリングをうけている。スクレーパー状の刃をつけて使用したと考えられる。130は玉髓製の剝片の石器でスクレーパー状の刃をつけて使用したものと考えられる。これらの石器類の時期は不明である。



第22図 奥山遺跡出土石器実測図

注

- (1) 『出雲國府跡発掘調査概報』 松江市教育委員会 1970年
- (2) 山本 清 「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 1971年
- (3) 田中彩太 「古墳時代木棺に用いられた金結金具」『考古学研究』第25巻第2号 1978年
- (4) 白井 熊 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984年

IV 自然科学分野の分析

(1) 松江市浜乃木町奥山遺跡B-II号横穴出土大刀の成分分析

日立金属株式会社 安来工場
冶金研究所長 清永欣吾

1. 試 料

試料を採取した大刀は長さ114cm、刀身最大幅5cmという極めて長大なもので、刀身刃口付近に花弁紋様が象嵌されている。このような大刀は関東を中心に全国で12例知られ、戦内政権下の特定工房で製作され、地方の豪族に配布されたものと推定されている。出土した奥山遺跡は古墳時代後期の横穴で出土土器の形から7世紀後半頃のものと考えられているが、大刀は刀身の特徴から6世紀前半に製作されたものと推定されている。⁽¹⁾

試料は大刀中央の背に近い部分より約3mm程度掘り下げ、錆びていない場所より採取した粉状のものである。なお、銅製品の腐葉はない。

2. 分析方法

粉末試料をさらに粉碎後、塩酸3mL、硝酸1mL、過酸0.5mLの水溶液(水5mL)に加え、130°C、2時間加圧分解した。

この分解溶液をポリエチレン製100mLメスフラスコに移し、水で100mLに希釈して直接ICP溶液発光分光分析装置(島津製作所製ICPV-1012型)で測定した。なお、炭素及び硫黄の分析も実施する予定であったが、試料不足のため分析は割愛した。

3. 分析結果

分析結果を表1に示す。

表1 試料の分析結果

(重量 %)

Si 珪素	Mn マンガン	P 磷	Ni ニッケル	Cr クロム	V バナジウム	Co コバルト	Cu 銅	Al アルミニウム	Ti チタン	Fe 鉄	Ca カルシウム	Mg マグネシウム	計
0.099	0.002	0.270	0.076	0.0003	0.0007	0.041	0.041	0.097	0.0019	92.94	0.033	0.005	93.61

4. 分析結果の考察

鉄分が約93%あり、遺存状態はかなりよいものである。従って分析値の信頼性はかなり高いものといえる。筆者の調査した古墳出土刀等の化学組成と比較すると表2の通りである。但し、鋳造前の金属性の組成で比較するために、各分析値について次式で基準化した。

$$[\text{Xi}] = \frac{100\text{Xi}}{\sum \text{Xi} + \text{Fe}} \quad (\%)$$

ここに、 Xi : i成分分析値 (%) (Feを除く)

Fe : Feの分析値 (%)

$[\text{Xi}]$: 金属鉄中の i成分の含有量 (%)

表2 古墳出土刀の化学組成

	Si	Mn	P	Ni	Cr	V	Co	Cu	Al	Ti	Ca	Mg	(重量 %)
本 試 料	0.106	0.002	0.288	0.081	0.0003	0.0007	0.044	0.044	0.104	0.0020	0.035	0.005	6世紀前半 金属性
宮山4号 大刀	0.030	<0.01	0.025	0.003	0.005	0.0091	0.0091	0.010	0.051	0.003	0.012	0.001	(2) 4世紀 金属性
物集女車塚 古墳大刀	(2.61)	0.006	0.092	0.002	—	0.0005	0.024	0.08	(0.48)	(0.025)	0.051	0.025	(3) 6世紀前半 鉄化
新沢千塚 255号大刀	(1.85)	0.017	1.21	0.117	<0.01	<0.01	0.05	0.067	(0.75)	(0.028)	—	—	(4) 古墳後期 鉄化
宇和奈良 大和6号 大刀	0.047 ~0.25	0.001 ~0.011	0.018 ~0.051	0.003 ~0.14	<0.001 ~0.002	<0.001 ~0.041	0.019 ~0.12	<0.01 ~0.02	<0.01 ~0.004	<0.005	—	—	(4) 古墳中期 金属性

※ ()の分析値は埋蔵時の周囲の土壤による汚染により富化したものと考えられる。

表2に示す宮山4号(島根県安来市)大刀は古墳前期のものであるが、本試料と比較し、Ni, Co, Cuが低く、逆にVが高い点において本試料と系統を異にする。物集女車塚古墳(京都府向日市)は本試料と同時期のもので、Ni量において差があるもののV, Co, Cu値は類似し、同系統の鉄であると判断される。新沢千塚255号墳(奈良県橿原市)出土大刀についても、本試料と同系統と判断できる。即ち、本試料は、Ni, Co, Cu, V量からみて、古墳中後期の大和地方の鉄の特徴(古墳前期出土鉄はNi, Co, Cu量が中後期のものに比較して少ない)を保有しており、花弁紋様が象徴されていることから、大和政権が下賜したとの説を裏付けるものである。

鉄原料が砂鉄か岩鉄系かの指標は化学組成の点からいえば、Ti及びV量(砂鉄系ではTi, Vが多い傾向がある)である。但し、Tiは埋蔵中の周囲の粘土質により汚染され富化する可能性があること、また製錬時酸化して鉄滓中に入り、鉄中には非金属介在物として残存する可能性はあるものの、製錬条件によって左右されるために適確な指標ではなく、むしろVの方が信ぴょう性が高い。

宮山4号墳出土大刀はV量が高目でかつ、その中に含まれていた非金属介在物中のTi量が約2.6

%と高かったため、砂鉄系原料を用いた可能性のあるものであるが、本試料においてはV量、Ti量ともに低く、岩鉄系の原料を用いたと推定する。Ca量が0.035%と多いが、古墳中～後期の鉄に含まれている量と同程度である。⁽²⁾⁽³⁾P量が多いが、この元素は外部からの汚染の影響が大きい。しかし古墳後期の鉄にはP量が多い傾向がある。⁽⁴⁾

5. 結 言

以上の分析結果ならびに考察により、本試料に関する結果を総括すると次の通りである。

- (1) 使用原料は岩鉄（鉱石）を用いたものと推定する。
- (2) Ni, Co, Cuの微量不純物含有量が高く、古墳中～後期の古墳出土鉄の特徴を明瞭に供えており、大和地方の同時代の出土鉄の化学組成とも類似している。

注

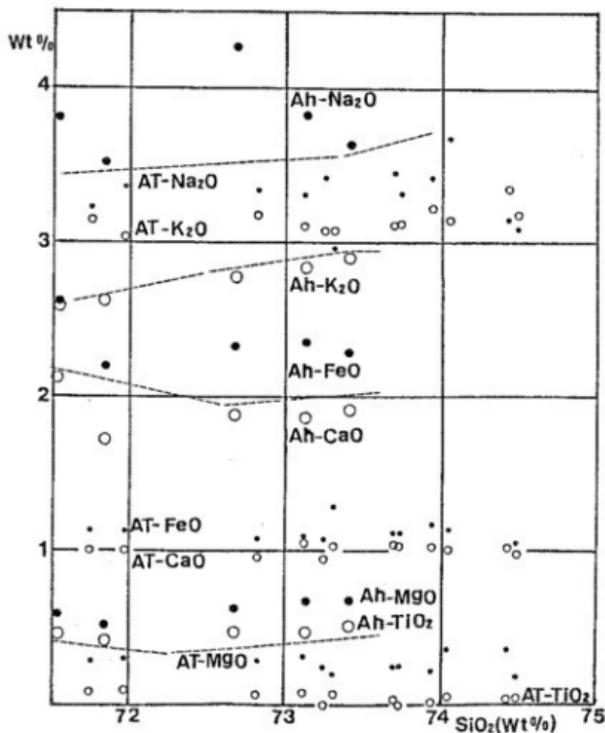
- (1) 島根県教育委員会：松江市浜乃木町県立女子短期大学移転用地内奥山遺跡現地見学会資料
(昭和62年7月19日)
- (2) 清永欣吾、齋崎博史：島根県の古墳より出土した鉄器の化学分析とその金属学的調査
(島根県教育委員会文化課提出、昭和60年12月11日)
- (3) 清永欣吾：長法寺谷山遺跡及び物集女平塚古墳出土鉄器の調査（京都府向日市教育委員会提出、昭和62年12月）
- (4) 清永欣吾：奈良県下の古墳より出土した鉄刀剣の化学分析（権原考古学研究所紀要：考古学論叢、第9号、1983年）

(2) 松江市奥山遺跡の互層状盛土層に見る黒色土層について

島根大学教育学部
教授 三浦 清

奥山遺跡付近に展開する丘陵の山頂部は巨礫を含むクサレ疊層でおおわれている。この礫種の多くが安山岩類であって著しく風化を受け、いわゆるクサリ疊化していることが多い。このような安山岩系の疊のほか、流紋岩系の岩石や、時には深成岩類も含まれていることがある。恐らく、この疊層は高位段丘疊層に對比されるもので、山廻層と同じ性格のものであろう。

このような疊層に対して基盤岩をなしでいるものはシルト岩である。青灰色をなすものが新鮮な部分で、風化すると茶褐色に変ずる。これは新第3



第23図 奥山遺跡付近に分布するクロボクの中の火山ガラス

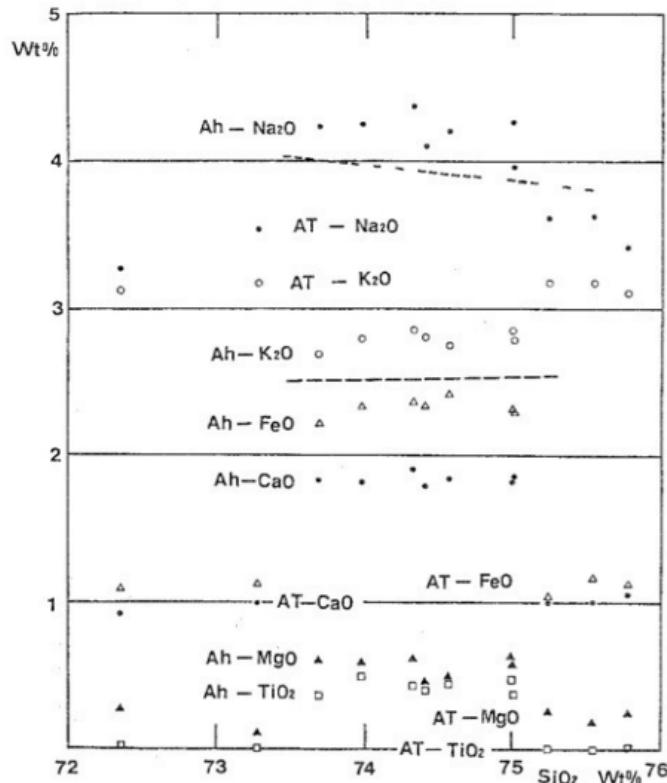
AT: アイラ火山灰起源 AH: アカホヤ火山灰起源

系の布志名層に対比されるものである。

この両者を被覆する形で、いわゆる洪積期末頃の崖疊上層と最上部はローム層からなる一連の堆積物がみられる。ローム層の下部は黄褐色、上部は黒色系土層からなっている。これらローム層の下部の部分は主としてアイラTn火山灰ATの火山ガラスが含まれ、上部の黒色系土層はいわゆる黒ボクでアイラTn火山灰ATのはかにアカホヤ火山灰Ah起源の火山ガラスを含んでいる。この火山ガラスの性質については第23図に示す。アイラTn火山灰ATは約21,000年以前に、鹿児島のアイラカルデラの形成によって噴火飛来したものである。また、アカホヤAh火山灰は鹿児島南方の鬼界カルデラの形成

に伴って噴火飛來したもので、その時代は約6,000年以前である。

横穴式墳墓は、高位段丘疊層側に掘さくなされているが、その位置は殆んど布志名層直上のレベルに相当する。それは布志名シルト層は一般に硬くて掘さくが困難であり、一方段丘疊層は風化しているため、適当の粘性があって、せん断強度も



第24図 奥山遺跡盛土中の互層状黒土層中の火山ガラス

AT：アイラ火山灰起源 Ah：アカホヤ火山灰起源

ある程度は確保出来るし、また掘さくが容易であることによるであろう。ただし、あまり地表部に近いレベルでは雨水の滲透も激しく、上のせん断抵抗力も減るので落盤現象が発生しやすい。結果としては高位段丘疊層の厚く残存している部分が選ばれているように見える。

このような横穴式墳墓は最後に盛土層でもって横穴入口一帯がおおわれている。盛土材料は、穴を掘さくした時の廃土、つまりはクサリ疊層が主であるが、これと交互に黒ボクの薄層が層状に盛られ、この互層状の締めかためられた土層は、殆んど斜面傾斜と調和した形につみあげられている。この黒ボク層は前述した地表部に自然に形成されたものが使用されている。それは第24図に示すような黒ボク特有の火山ガラスによっても理解される。

クサリ疊層を材料とする土層は、恐らくその風化状態からしても、よく締めかためることが出来、水の滲透に対しては、かなりそれを防止出来るような材料である。一方クロボク層は、水をかなり滲透させる能力をもつと同時に、帶水しない状態のもとでは乾きやすく、通気性がよく発達する性質のものである。したがって、ある程度の排水機能を持たせると同時に、盛土の含水量のコントロール材として使用されたのかもしれない。

しかし、古墳の盛土材として黒ボクが互層状に盛土として使用されている例が多いので、以上の機能の為ばかりでなく、他の目的があるのかもしれない。

(3) 松江市奥山遺跡（横穴群）A-I号横穴前庭部の埋め土について

島根大学理学部地質学教室

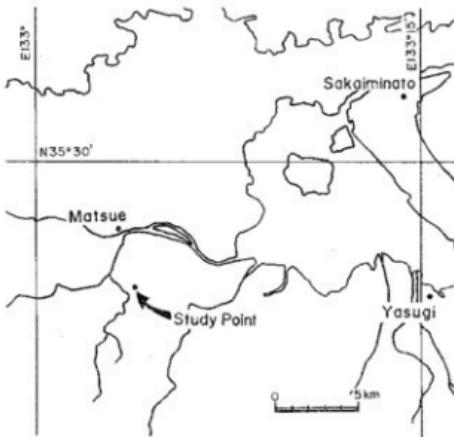
渡辺正巳

はじめに

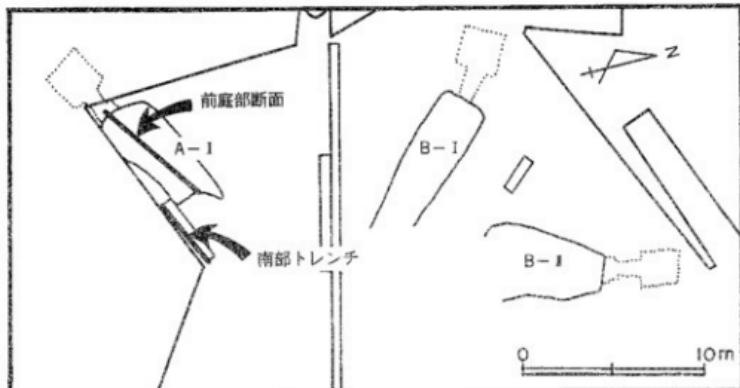
奥山遺跡は、松江市南方約4kmの丘陵地に位置し（第25図）、乃木層中を掘込んだ7世紀の横穴群（島根県教育委員会、1988）である。付近一帯には弥生時代の墳墓群や多数の古墳群、遺物散布地などの遺跡がある。

今回、同遺跡のA-I号横穴（第26図）、前庭部の埋め土について、埋め戻しの過程解明のために、粒度分析及び花粉分析を試みた。粒度分析では、埋め土は3分類群に分かれ

た。花粉分析では、花粉と判断でき



第25図 奥山遺跡位置図



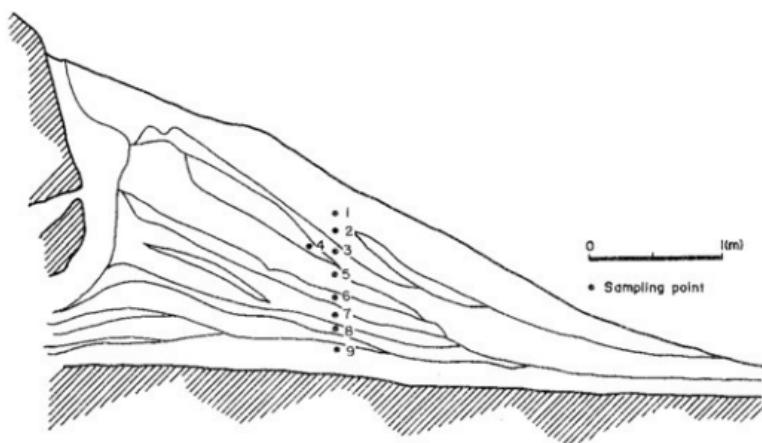
第26図 奥山遺跡横穴分布図

るものは、観察されなかった。本報では、粒度分析の結果について述べる。

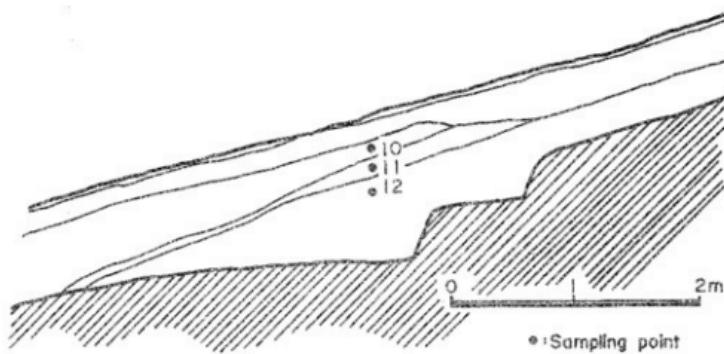
方法及び結果

試料採取地点を第27,28図に示す。前庭部断面において9試料（第27図）、南部トレンチにおいて3試料（第28図）の計12試料について粒度分析を行った。

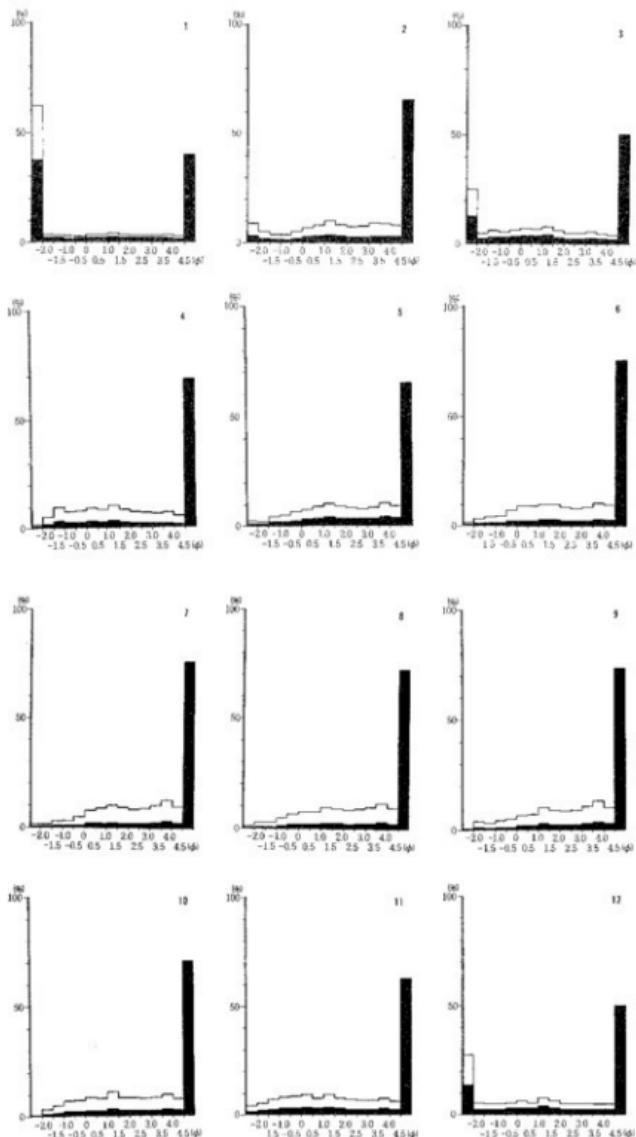
試料は、それぞれ100 g程度を採取し、過酸化水素処理を行い有機物を除去した後、 $-2\phi \sim 4.5\phi$ のふるいにかけた。結果は、重量パーセントで、第29図にヒストグラムとして、第30図に累積頻



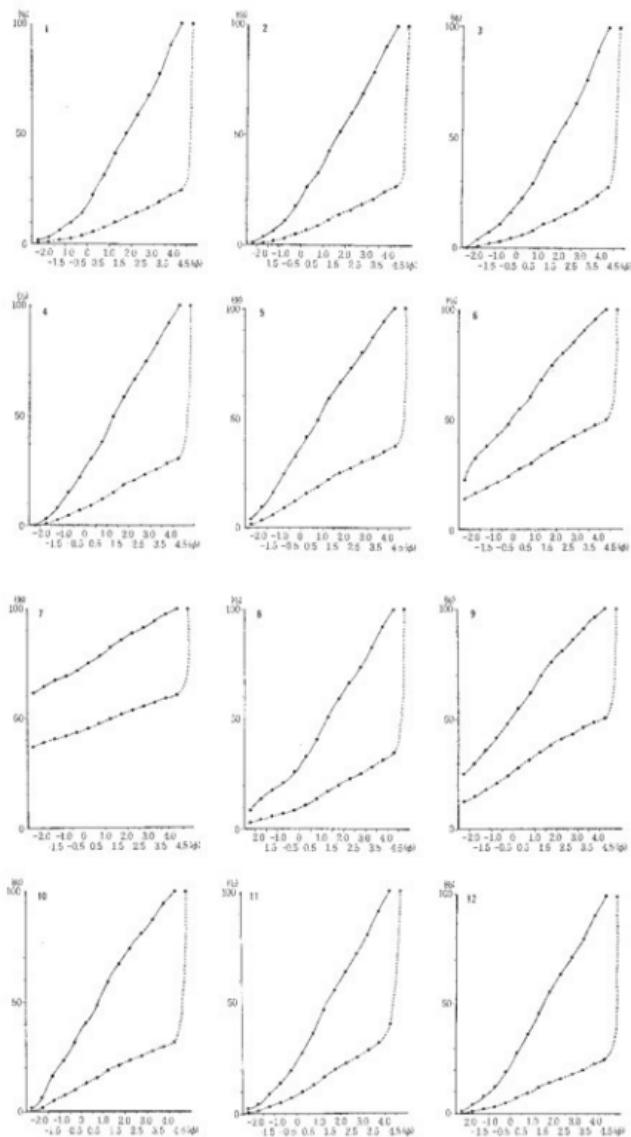
第27図 A-1号横穴前部試料採取位置図



第28図 A-1号横穴南部トレンチ試料採取位置図



第29図 粒度分析結果！
(黒は4.5φ以上を含む。白は4.5φ以上を含まない。)



第30図 粒度分析結果2
(点線は4.5φ以上を含む。実線は4.5φ以上を含まない。)

度曲線としてしめす。

考 察

全試料とも4.5φより細かい粒径の重量が40パーセント以上と多く、粒度分析により細分した範囲には顕著なピークが見られなかった。このことより細かい分類群を設定することは困難である。そこで、前庭部断面を大きく3つの分類群に、南部トレンドを2つの分類群に分けた。

以下に各々の特徴を述べる。

前庭部Ⅰ層（試料番号1, 2） 4.5φより細かい粒径が高率を示し、4.5φより粗い粒径でも細かい方が多い傾向がある。

前庭部Ⅱ層（試料番号3, 4, 5） 4.5φより細かい粒径が高率を示すが、4.5φより粗い粒径では粗い粒径の方が多い傾向がある。

前庭部Ⅲ層（試料番号6, 7, 8, 9） 4.5φより細かい粒径と-2φより粗い粒径が高率を示す。

南部トレンドⅠ層（試料番号10） 4.5φより細かい粒径が高率を示すが、4.5φより粗い粒径では粗い粒径の方が多い傾向がある。

南部トレンドⅡ層（試料番号11, 12） 4.5φより細かい粒径が高率を示し、4.5φより粗い粒径でも細かい方が多い傾向がある。

前庭部Ⅰ層は、南部トレンドⅡ層に粒度組成が酷似する。このことより、前庭部Ⅰ層の堆積過程と南部トレンドⅢ層の堆積過程は同様なものと考えられる。

前庭部Ⅱ層は南部トレンドⅠ層に粒度組成が酷似することから、南部トレンドⅠ層と同様な堆積過程が考えられる。

前庭部Ⅲ層は、前庭部断面の最下層をなし、乃木層起源と考えられる風化の激しい礫と、乃木層のマトリックスが泥化せず塊状となったものが混入している。前庭部Ⅲ層で4.5φより細かい粒径が多いのは、過酸化水素処理の際に礫、塊状のマトリックスが分解したものと考えられる。

参考文献

- 隣接性堆積物研究会、1983：地学叢書24 堆積物の研究法 —礫岩・砂岩・泥岩—、P377。
地学団体研究会、東京
- 島根県教育委員会、1988：奥山遺跡発掘調査報告書、島根県、島根
- 庄司力伸、1971：堆積学、P284、朝倉書店、東京

V A-I号横穴の保存処置

島根女子短期大学の移転にともなって検出された横穴のうち、調査区の南西隅に位置するA-I号横穴は工事対象地区の境にあることから、法面工事の傾斜を変えることにより現状で残すことも可能であろうと判断された。しかし、横穴が穿たれている乃木層は大小の通称クサリ礫を含み、極めてもろく、いつ玄室天井部の崩壊が起きるか予想できない状態であった。そこで埋め戻すことが今のところ現形を維持する最良の方法であるが、空洞化した玄室に上記した状態からすると充填材が必要と考えられた。以下玄室内の充填作業を記すことにする。①充填材は玄室床面から天井部まで砂8.68m³を砂嚢に詰め積み上げる。②積み上げた砂嚢と玄室天井部との間隙にセメント(40kg/10袋)と珪酸ソーダ(6ドラム)を圧搾ポンプとノズルを使用して注入する。③墓道部に土を詰め法面に、芝を張り作業を完了する。なお、B-I号横穴玄室内出土人骨は極めてもらい状態となっていたため、土とともに採集しA-I号横穴埋め戻し時に墓道壁沿へ磁器壺に入れ納骨した。



注入用セメント40kg入 10袋



注入用珪酸ソーダ 6 ドラム



注入用圧縮ポンプ設置状況



注入保存完了状況

VI ま　と　め

今回の調査は横穴群の規模からすると、その一部を調査したにすぎないが、そこから派生する問題点は少なくない。以下発掘調査の報告を終えるに際し、本文中でふれえなかった諸点等も含めて記し、むすびとしたい。

横穴の掘削 横穴の掘削に際しては、以下のようない点が指摘できる。つまり丘陵頂部から横穴墓道端部（標高32m）にかけての斜面の旧表土を一挙に除去して行なわれたことがうかがえた。これが顕著に認められるのはA-I号横穴の南東に位置する調査区壁の上層（図版2-3）で、人為的移動がされたことのない黒色土（アイラ・アカホヤ層）の上に横穴掘削時の堆土である赤褐色土層が堆積する。その上方には先の黒色土は存在せず、堆土と墓道端部との間には幅約1mの平坦面が走る。これはA群とB群を結ぶ幹線の墓道であったと考えられる。

構造上の特徴 奥山遺跡から検出された3つの横穴の形式的な特徴をとらえるために(1)玄室の床面形、(2)壁と天井の境界、(3)天井の形態、(4)羨道および羨門の形態と関係、(5)構の形態、(6)墓道（前庭部）の形態及び開口方向の6つの観点をおき、以下述べていくものとする。

(1) 玄室の床面形

A-I・B-I号横穴については、ほぼ正方形に近い形を呈しているが、B-II号横穴は奥行がやや長くなり、若干歪形ではあるが縦長方形に近い平面形を呈している。

(2) 壁と天井の境界

A-I・B-I号横穴とも奥、左右各壁面に軒の刻線をもって境界を表現している。B-II号横穴については不明である。

(3) 天井の形態

A-I・B-I号横穴とも天井部は屋根の形にはりこまれており、四注平入式の形態である。また、前述のように壁と天井の境は刻線によって明確に表現されており整正家形であり、松江市孤谷⁽¹⁾横穴群第12号横穴と類似した形態である。B-II号横穴については不明である。

(4) 羨道及び羨門の形態と関係

A-I号横穴は、羨門と羨道の長さがほぼ等しくなっている。それに対してB-I・B-II号横穴は羨門部より羨道が長いタイプである。このうちB-II号横穴の羨門部の長さが40cm余りしかなく極めて短くなっている。また、A-I号横穴の羨道の両壁面には削りだしのアクセントが床面に對して水平に走っており、比較的ていねいに仕上げてある。

(5) 溝の形態

横穴床面に溝が認められ、これらは排水と床面を区画することを兼ねていたものと考えられる。A-I号横穴では玄室中央部を主軸に沿って溝が掘られており、この溝によって排水とともに、玄室床面を2分割し追葬に備えたものと推察される。B-I号横穴では、玄室中央部を走る溝の他、玄室壁沿いにも溝が掘られており、これらの溝により2つの屍床を際立たせる役目も果している。

(6) 墓道（前庭部）の形態及び開口方向

A-I・B-I号横穴の墓道は、ともに狭長なプランであるのに対して、B-II号横穴では、先端にいくほど広くなっている。また、西側壁端部がL字形に屈曲していて、開口方向を意識したようにも思われる。

これらの特徴から推察するに、A-I・B-I号横穴は、その形態が非常によく似かよっているが、B-II号横穴は玄室プランや羨門、墓道（前庭部）の形態などから、他の2穴とかなり趣を異にしており、その意図に何らかの違いがあったのではないかと推測される。

埋めもどし 横穴の墓道（前庭部）に堆積した土については従来種々の推測^⑨がなされてきたところであるが、A-I・B-I号横穴とB-II号横穴との土層堆積状態には明瞭な相違があり注意される。つまり、前2者の横穴は黒色土を用いた埋めもどしが、かなり入念に行なわれたことがうかがえるのに対し、B-II号横穴では黒色土層の堆積は認められなかった。このことから墓道（前庭部）の埋めもどしに際して、両者には異った意識がはたらいたのであろうと推定される。

ところで、この埋めもどしがいつ行なわれたのかという問題であるが、B-I号横穴を見ると、第3層の黒褐色土層中に赤褐色粘性土層がレンズ状に入り、その東端部は上下どの層へも分層線を延長しない状況であった。このような土層の堆積がみられるのは、極めて短時間に一挙に埋めもどしを行なった時に生じる現象であろうと考えられる。この横穴は3体分の人骨が検出されていたにもかかわらず、墓道の土層に追葬をうかがわせる乱れがないことから、埋め戻しは全員の埋葬が終了した後とすることができよう。なお、B-I・II号横穴玄室内に小動物の爪痕が認められたことは、全員の埋葬が完了するまでの期間、閉塞が極めて簡単なものであったことを示唆している。

横穴の埋葬人員の問題 被葬者数を各横穴の検出状況から推定してみたい。検出した3穴のうちで最も埋葬人員を推定しやすいのは人骨が出土したB-I号横穴であろう。B-I号横穴出土の人骨は遺存状態が悪く正確な人員は不明であるが、少なくとも成人1体、幼児1体、女性あるいは若年者1体の計3体が埋葬されていたようである。

B-I号以外の横穴においては、玄室床面から出土した石材や鉄釘の状況から埋葬人員を推察しなければならない。まず、A-I号横穴からは、組合木棺に使用された鉄釘と石枕が出土している。鉄釘のはとんどが奥壁の方へ搔き寄せられている状況や、石枕の下から鉄釘が出土していることか

ら、組合木棺による埋葬が行なわれた後、石枕を用いた追葬が行なわれたと推定される。したがって、A-I号横穴には最低2体の被葬者があったものといえる。次にB-II号横穴の玄室床面からは6個の石材が出土している。玄門左袖寄りの1対の石材は石枕と考えられる。床面右側の石材は右袖寄りに1対と奥壁寄りにやや離れて1対配置されていた。この配置状況から見て、2対の石材を棺座に利用したか、あるいは遺体を交互に置いて1対ずつ石枕にしたと推定される⁽⁴⁾。このことからB-II号横穴では少なくとも2~3体の埋葬が行なわれたといえる。

3穴の横穴の他、B-II号横穴に隣接して穿たれたSK-01が検出されている。このSK-01はかなり大型で掘り方もしっかりとしており、松江市法吉町ヒノサン山横穴群中にみられたような土壙墓⁽⁵⁾であった可能性も考慮されよう。土壙墓であるとすれば、最低1人は埋葬されたことになる。そうすると横穴のごく入念な埋葬がとり行なわれた人々と、その脇に簡単な埋葬方法で葬られた人々の存在が指摘でき、当時の墓制を研究する上で重大な視点となるであろう。今後の類例の増加を待って検討したい。

土器窓 土器窓で採取された土器片は、横穴や、その他の遺構から出土した土器とは接合できず、横穴から流出したものが堆積したとは考えられない。そこで、出土した土器は、高広編年ⅡA期⁽⁶⁾に相当し、奥山遺跡出土遺物の中では古い時期のものである。また、地形からみて調査区外の南斜面にも横穴が存在する可能性があり、それらの範囲を考え合わせて横穴群としてとらえた場合、土器窓の位置は、ほぼ中央部分にあたることも推測される。そうしたことから土器窓部分は横穴築造時または築造後それも比較的早い時期に何らかの祭祀的儀礼を行なった痕跡とも考えられる。

出土土器からみた各横穴の築造時期 当遺跡の横穴からは比較的多くの土器が出土し、そのほとんどは山本編年Ⅳ期に相当する須恵器であった。近年、この山本編年Ⅳ期の須恵器を型式的な変化から細分化し、編年を行う研究が進められている。そこで、本書では島根県下で行なわれている編年の研究成果を参考に、須恵器の蓋坏セットを中心として時期を検討し、横穴の築造時期を推察したい。

まず、A-I号横穴出土土器のうち最も古い時期の土器は高広編年（以下高広と略）ⅡA期の特徴を持つ坏身（挿図番号10〔以下番号のみ記す〕）である。また坏（11）は底部に回転糸切痕がみられ口縁部の特徴などから高広ⅣA期・柳浦編年⁽⁷⁾（以下柳浦と略）4式に相当すると考えられA-I号横穴では最も新しい時期のものである。この間には、高広ⅡB期・柳浦1式の蓋坏セット（8, 9）、高広ⅡB期・柳浦3式の蓋（12）が入る。また小型壺（3）と有蓋短頸壺セット（5, 6）は回転ヘラ削りを施すことやカキ目調整を施すこと等から、高広ⅡA~ⅡB期に相当すると考えられる。

B-I号横穴出土の蓋坏類（48, 49, 50, 51, 61, 62）は高広ⅡA期の特徴を持つもので、同穴では

最も古い時期のものである。また蓋環のセット（46, 47）は高広ⅡA期・柳浦2式の特徴を持つもので、B-I号横穴の出土土器中最も新しい。この間に入る土器としては、蓋の形態が身へ逆転していく時期の环（52, 53, 54, 55, 56, 60）や高広ⅡB期・柳浦1式の特徴を持つ蓋（57, 58, 59）が該当する。

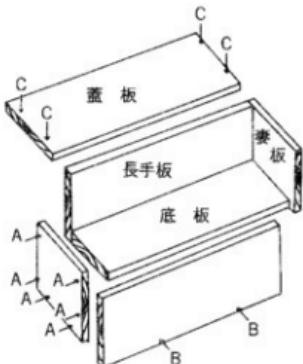
B-II号横穴出土土器では蓋环（78, 79, 93）が高広ⅡA期の特徴を持つもので最も古い時期のものである。また环（80, 81, 82, 83）の口縁部は高広ⅡB～ⅣA期・柳浦3～4式の特徴を持つと考えられるが、底部を欠損しているため正確な時期は定められなかった。この間には、高広ⅡA期・柳浦2式相当時期の（67, 68, 69）や、高広遺跡Ⅳ区5号横穴出土の横瓶（ⅡB期）に形態・手法が類似する92が入る。また、74も口縁部が簡略化され、頸部は細く体部も球形で文様が施されない特徴から、同穴出土土器の中では比較的新しい時期に比定されると思われる。

以上、検討した出土土器の時期から横穴の築造時期を推察したい。横穴の築造時期を考えるめやすとしては、その穴から出土した最も古い時期の土器を考えるのが妥当であろう。このことから考えると当遺跡の3穴から出土した最も古い時期の土器は、いずれも高広ⅡA期の特徴を持つものであり、3穴はほぼ同時期に築造されたものといえる。その後、A-I号横穴では高広ⅡB期・柳浦1式相当時期で一時途絶えた後、高広ⅡB期・柳浦3式相当時期まで、B-II号横穴では高広ⅡA期・柳浦2式相当時期まで、B-II号横穴では高広ⅡA期で一時途絶えた後、高広ⅡB期・柳浦3式相当時期までそれぞれ土器の型式変化が追える。

このうち、B-II号横穴では高広ⅡA期・柳浦2式相当時期以後、埋葬が行なわれた痕跡がみられず、この時期に追葬が終了したものといえる。

また、B-I号横穴では高広ⅡA期・柳浦2式以後の土器がみられず、これ以後埋葬あるいは祭祀が行なわれなくなったと考えられる。最後にA-I号横穴については、高広ⅡB期・柳浦3式相当時期を最後に同穴の機能が終るものと推定されるが、追葬がいつ頃まで行なわれたかを断定することはできなかった。

木棺 A-I号横穴玄室で検出された鉄釘は、その量から1個の木棺を組むためのものと判断された。さらに付着木理の方向をてがかりに頭部を欠損している1点を除き、a類13, b類4, c類4とに分けることができた。3種に分けた鉄釘を過



第31図 組合木棺模式図

不足なく、用いる仕口を想定することによって（第31図）のような棺構造を推定した。⁽¹³⁾

大刀 B-Ⅱ号横穴出土大刀は全長114cm、最大幅5cmを測るかなり大振りのものであることとともに、鏡元に花形の象嵌が施されていること、さらに茎の刀闊よりに台形削込みが認められることが注意される。

象嵌については時期を不問とすれば、本例を含め全国で12例があり、県内においては出雲市上塩治塚山古墳出土大刀につき2例となる類例の僅少なものであった。⁽¹⁴⁾

茎の削込みについては栃木県七郷鏡塚古墳の調査以来、柄に勾金を取付けるためのものであり、この種のものは外装がなくとも玉纏大刀になる可能性が指摘されている。このような大刀は儀杖用のもので5世紀後半から6世紀前半期に盛行するとされている。⁽¹⁵⁾以上のような時期にB-Ⅱ号横穴出土大刀も製造されたとするならば、約100年近い間伝世したことになる。從来、後期古墳から出土する装飾付大刀等は中央から各地域の特定首長に下賜されたものであり、彼の死に際して副葬されるものと解されてきた。今回のように長期にわたって伝世することは極めて稀有な例といえよう。

いずれにしろ、このような形態の大刀を副葬する古墳は各地においても屈指の地域首長墓である例が多く、大陸の色彩が強い副葬品をもつものがあるとされてきた。本横穴の被葬者がいかなる経緯によってこの大刀を入手したのか、また何故長期にわたって伝世し続けたものがB-Ⅱ号横穴に副葬されねばならなかったのか、さらにこの横穴群を構成する集団の出自等、検討されなければならない点は多い。

注

- (1) 『島根県埋蔵文化財調査報告書 第8集』 島根県教育委員会 昭和52年
- (2) 『高広遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1984年
- (3) 玄門寄りの袖に頭位を向ける例が何例かみられる。陰田遺跡第12号横穴・21号横穴・22号横穴等がある。『一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 陰田』 建設省中国地方建設局倉吉工事事務所・米子市教育委員会 1984年。本遺跡もそういう例から考え、その部分の石に被葬者の頭が置かれていたと考えられる。
- (4) 邑智郡瑞穂町江迫横穴群第1号横穴では、石を棺座として木棺を安置した痕跡が認められた。また敷石郡三刀屋町東下谷横穴群第6号横穴では、遺体を左右それぞれ頭位を逆にして2体重ね合わせた状態の人骨が出土している。
- (5) 山本 清「小規模古墳について 補注」『山陰古墳文化の研究』 1971年
- (6) 注(2)と同じ。
- (7) 阿崎雄二郎氏は、「十王免横穴群」「八雲立つ風土記の丘周辺の文化財」 島根県教育委員会 昭和50年において、葬送儀礼が時代が下るにしたがって、前庭部での墓前祭に移行していく可能性を示唆しておられる。
- (8) 山本 清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 1971年

- (9) ①『出雲国史発掘調査報告』 松江市教育委員会 1970年
②注(2)と同じ
- ③柳浦俊一 「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号 1980年
松江考古学講話会
④注(3)と同じ。
- ⑤『青木遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 鳥取県教育委員会 1976~1978年 等がある。
- ⑩ 注(2)と同じ。
- ⑪ 注(9)③と同じ。
- ⑫ 高広編年Ⅰ A期とⅡ B期の中間に位置する土器と考えられる。
- ⑬ 本木棺は側面に長手板2・妻板2・底板1・蓋板1の計6枚からなる細長い箱形を呈すものであったと考えられる。棺の仕口については本文に最も可能性の高い1例を示したが、以下のような例も考えられる。つまり、妻板の一方の木口は外面に、他方の木口は長手板の内面に接する形に組み、底板は4枚の側板によって囲まれる形となるものである。しかし、埋屈上は箱形に組むことは可能であるが一般的に認めがたい仕口である。
- 本文にかけた例のような棺の構造としては陰田11号横穴内の石棺（注3）と同じ）や安来市黒井田町客神社跡古墳の石棺（『客神社跡古墳について』『ふいへるどの～と』 松本岩雄 1983年）等に類似している。
- ⑭ 西山要一 「古墳時代の象嵌一刀装具について」『考古学雑誌』第72巻第1号 1986年9月
- ⑮ 『週報 いざむ』 №1401 出雲市長公室編集 1984 同様な割込みをもつものとして、1986年島根県教育委員会が実施した松江市吉曾志大谷1号墳（全長45.5mを測る前方後方墳：5世紀末築造）からも出土している。
- ⑯ 大和久義平 「玉継大刀について」『八幡一郎先生頌寿記念考古論集 日本史の黎明』 1985年3月
- ⑰ 注⑯と同じ。
- ⑱ 奥山B-1号横穴出土大刀に類似したものとしては島根県斐川町西1号墳（10×8mを測る方墳で5世紀後半に築造）からも出土していることを調査者の火道牛弘氏の教示により知った。このことから5世紀末から6世紀前半期に築造された小規模古墳の被葬者の中にもこの種の大刀の佩刀が行なわれたことを示している。
- 奥山遺跡の周辺で西1号墳と築造時期や規模を等しくするものを抽出すると個々の規模は小さいが群をなす長砂古墳群があり、それよりやや大きいものとして二子塚古墳、乃木二子塚があげられる。
- 本横穴群の被葬者はそれらの古墳群を形成した人々の末裔にあたる可能性も考慮されよう。

図版



1 遺跡遠景
調査前(東方より)



2 遺跡近景
第1次調査終了時
(東方より)



3 遺跡近景
第2次調査終了時
(東方より)

1 A-I号横穴
調査前(北東方より)



2 同調査後(北東方より)



3 同墓道部
土層堆積状況(北方より)



1 A-I号横穴
墓道土層堆積狀況
(東方より)



2 同羨門閉塞狀況



3 同閉塞石除去後



1 B-I号横穴
調査前(東方より)



2 同墓道土層堆積状況
(北東方より)



3 同遺物出土状況



1 B-I 号横穴
墓道遺物出土狀況



2 同遺物出土狀況



3 同羨門閉塞石除去後





1 第1次調査
第27トレンチ



2 同遺物出土状況



3 B-II号横穴前底部
土層堆積状況(西方より)

1 B - II 号横穴全景
(南方より)



2 同前庭部(南方より)



3 同玄室遺物出土状況



1 B-II号横穴玄室
遺物出土状況



2 同前底部(北方より)



3 SK-01(南方より)





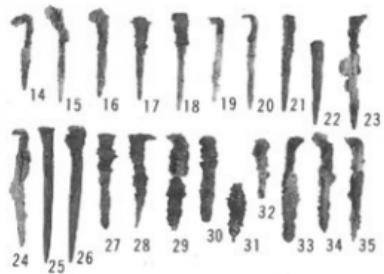
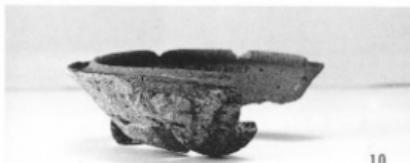
1 SK-01(北方より)



2 SK-02



3 土器溜



36



37



38



41



39



42



43



45



44



40



47



48



49



50



51



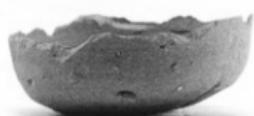
52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



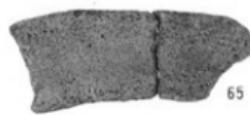
62



63



64



65





68



69



70



71



73



74



67



75



76



77



78 79



82



84



89



72



80



81



83



85



86



87



93



88



90



91



92



92



94



100



95



101



96



106



97



103



98



102



99



104



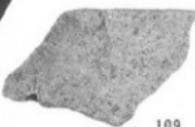
105



107



108



109



110



111



113



112



116



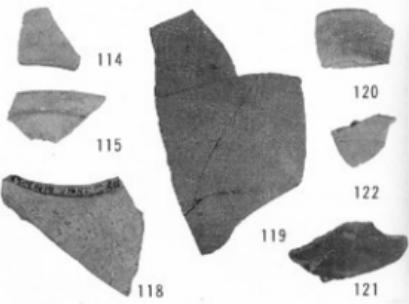
117



123



124



114



115



118



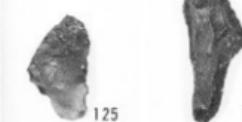
119



120



121



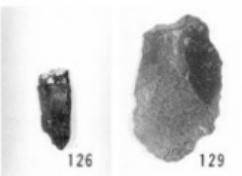
125



128



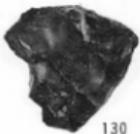
127



126



129

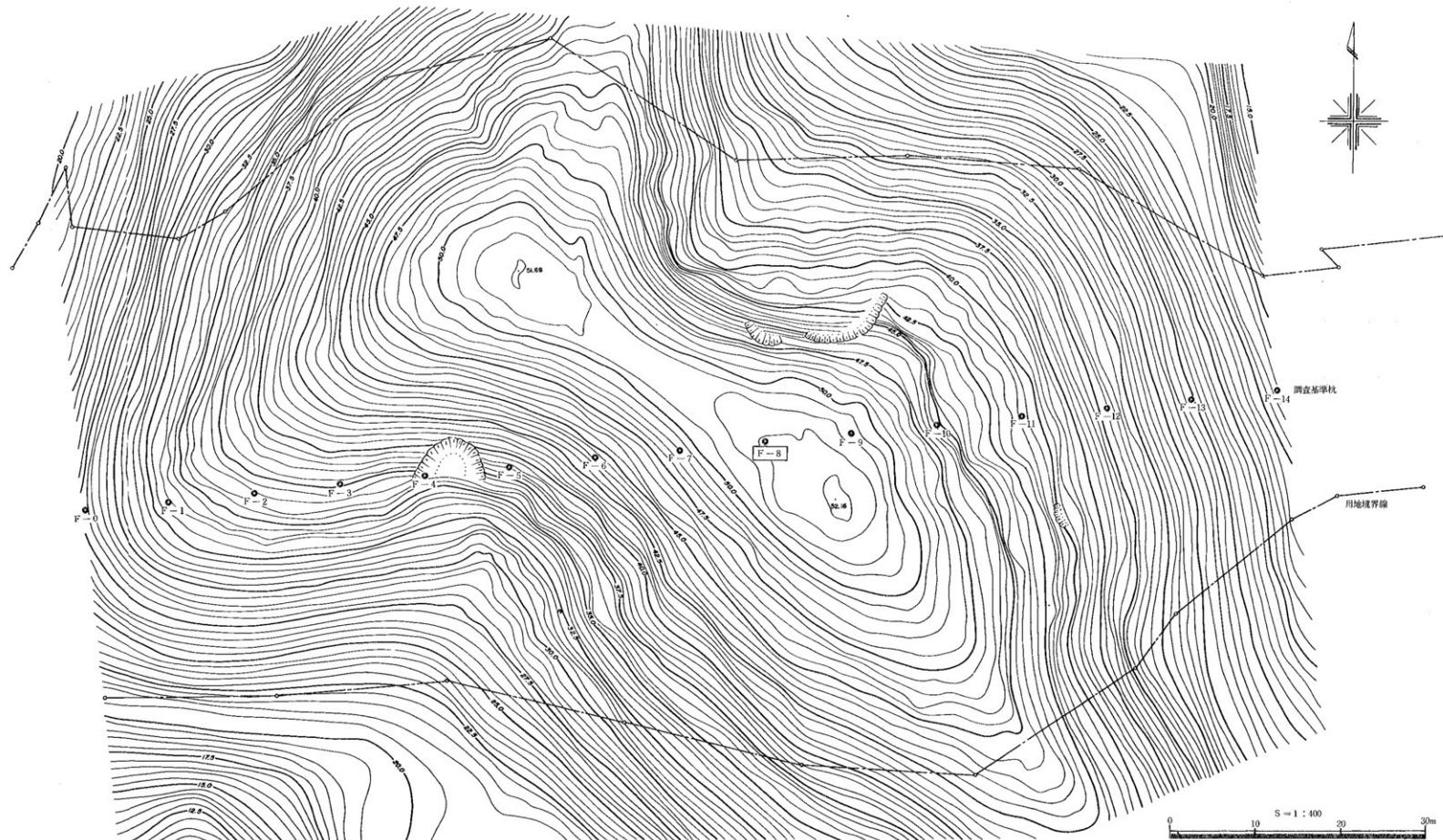


130

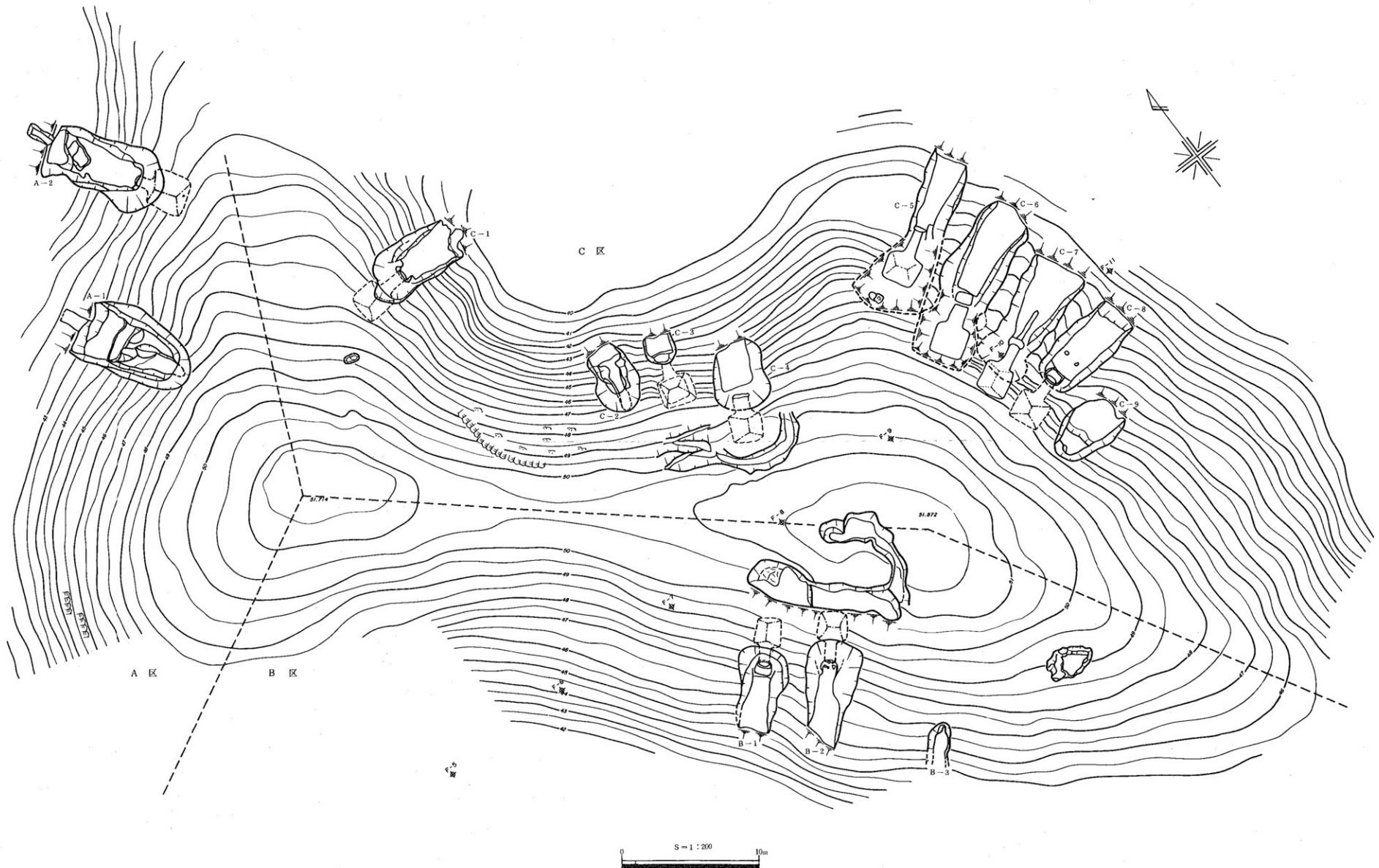
島根女子短期大学移転予定地
奥山遺跡発掘調査報告書

昭和 63 年 3 月

発行 島根県教育委員会
印刷 菅谷丁印刷



付図1 大塔山横穴墓群調査前地形測量図



付图2 大塔山横穴墓群全体図